

獄中豪傑の世界

——李光洙の中学時代の読書歴と日本文学——

波田野 節子

【要旨】 李光洙は自分が明治学院中学時代にどのような書物に接したか、どの作家のどの作品に感銘をうけたかを、いくつかの回想録に書きのこしている。本稿ではそれらの作品を具体的に調査し、その中で李光洙にもっとも強い印象を与えたと思われる作家と作品を明らかにし、それらが李光洙の最初期作品にどのような形であらわれているかを考察すると、中学時代の李光洙の世界観に近づこうと試みた。

李光洙が中学時代の終わりころもっとも心酔していたのは、先輩の洪命憲のすすめで読んだ詩人バイロンであるが、その受容は日本主義者木村鷹太郎の日本語翻訳と解釈を媒介としていた。日清・日露戦争のはさまの明治三〇年代に日本がおかれていた状況を反映する木村の危機意識は、李光洙の祖国が直面していた独立の危機と重なりあって李光洙に深い感銘をあたえ、それはやがて五山で合併をむかえたときに、李光洙が生存競争の非情を痛感して進化論を真理として受け入れる下地を準備することになった。一方、木村のバイロン解釈は、日本留学中の魯迅にも強い印象をあたえた。バイロンがうたった強大な意志力を、国民に独立の気概をあたえる詩人の叫びとして功利的に考えた点は、木村も李光洙も魯迅も共通している。しかし、日露戦争の勝利で列強に並んだと自認した日本では「バイロン熱」は急速に色褪せ、進化論の「力の論理」を受け入れた李光洙が祖国を強者にするための準備論へと進んだのに反し、日本留学以前すでに進化論にであっていた魯迅は、人間の絶対的な意志による進化論克服の道を模索していった。

一、はじめに

「我々にもっとも深くて大きな興味をあたえるもの、それは我々自身に關することだ。」一九一六年の文学論「文学이란 何오」のなかで、李光洙はこのように書いている。⁽¹⁾「告白」は自己に執着する浪漫主義作家の好んで書くものだが、李光洙にもまた人生のふしめに際しては、つねに自己をふりかえり、自己を語る傾向があった。中学時代に文章を書き始めた李光洙が、卒業後に五山学校で日韓併合をむかえて一時的に筆をおく直前に書いた「余의 自覺한 人生」⁽²⁾(一九一〇)は、十八才の李光洙がはやくもそれまでの精神遍歴を語ったものであった。一九一五年、五山をすて二度めの東京留学をしようとしていたとき、五山学校時代を整理するかのよう書かれたのが、自伝的小説「金鏡」⁽³⁾であったし、その二年後に『毎日申報』に連載された近代朝鮮文学最初の長編小説「無情」は、ある意味では李光洙があらたな出発のために行った過去の総括とも受けとられる作品である。そして一九三六年、人生の険しい時期をむかえていた李光洙は、あらためて若いころの自分をふりかえり、「多難한 半生의 途程」⁽⁴⁾と自伝的小説「나의 自傳」⁽⁵⁾を執筆した。植民地時代の終歪をむかえた後には、民族主義者としての自己を再点検するための「나의 告白」⁽⁶⁾と、ルソーの「告白」を意識した赤裸々の告白「나」⁽⁷⁾を著している。⁽⁸⁾

このように何度もくりかえされる「告白」では、最初の日本留学時代、それに続く五山学校時代と大陸放浪、そして二度目の日本留学時代が、さまざまな形で語られるが、その中で李光洙はそのころ接した書物についても語っている。なかでもとりわけ印象深く語られるのは、最初の留学時代すなわち、中学時代における読書体験である。ほかの時期に読んだ書物についても語られてはいるが、何とんでも中学時代のものが一番くわしく、印象も強烈である。人生に目をひらき、文学に傾倒し、ついに自分でも創作を始めたこの時期に、李光洙が読書から得たものが大きかったであろうことは、想像にかたくない。

李光洙が日本で文学作品を耽読したのは、明治学院中学に編入した三年生の秋(一九〇七)から、五年生で卒業するまで(一九一〇)の約二年半だったと推定される。一九〇五年に一進会の留学生として来日した李光洙は、まず日本語習得のための学校に入り、翌年大城中学に入学したものの、天道教の分裂による学費中断のために退学をよぎなくされ、一九〇六年末に一時帰国をしている。おちついて読書に没頭できるような精神的かつ物質的余裕をもてたのは、国費留学生として再来日し、明治学院に入学してからのことだと思われる。「金鏡」によれば、李光洙が読書体験で初めて「精神上的の影響」をうけた小説は木下尚江の「火の柱」で、木下からは「キリスト教的理想」⁽⁹⁾をえたという。李光洙がキリスト教と出会ったのはミッションスクールである明治学院においてであるから、彼の精神に影響をあたえるような本格的な読書が、明治学院に入ってから始まったことは、このことから知られるのである。

本稿でおこなうのは、作家としてのスタートをきったこの時代に李光洙がもっていた世界観を、回想録にあらわれた読書歴を通してうかがおうという試みである。前回の論文「李光洙の自我」⁽¹⁰⁾において筆者は、李光洙の初期の作品にあらわれた自我覚醒の様相を考察し、そこからこの時期の李光洙の世界観をさぐることを試みた。同じ対象に読書歴という違った角度からアプローチすることによって、この世界観をより多角的にまた深みをもって理解することが、本稿の目的である。その意味で、本稿は「李光洙の自我」の続編といつてよい。

「李光洙の自我」でも述べたように、李光洙の初期創作に關する多くの先行研究では、長編「無情」以前、すなわち中学と大学の二度の留学時代を「初期」として一括して扱うのが通例であり、中学時代だけを取り出して論じたものも見当たらない。李光洙の読書歴については、李光洙が幼年期に読んだ李朝小説と長編「無情」の関係を論じて、「無情」は本質的に李朝小説の継承であり、西欧小説からの影響は少ないとみる成賢慶氏の論文「無情」⁽¹¹⁾斗ユ以前小説」⁽¹²⁾、李光洙の初期作品と同時代の新小説とを比較し、李光洙の「開拓者」⁽¹³⁾までの初期作品は文学史的には新小説の領域におくべきであると主張する宋敏鎬氏の「春園初期作品의 文学史的研究」⁽¹⁴⁾、また長編「無情」と「彩鳳感別

曲」とのかかわりを論じた韓承玉氏の「李光洙研究」⁽¹⁴⁾など、朝鮮小説との関係をとりあつた論文はあるが、日本文学と西洋文学の読書歴に関する研究は少ない。トルストイを源泉としたためにおこつた李光洙文学と日本文学との「類似」を問題にした李善榮氏の「春園의 比較文学的考察」、國木田独歩の同名小説との比較研究である宋百憲氏の「春園의 少年의 悲哀」研究⁽¹⁶⁾などが目につく程度である。中学時代の李光洙の読書歴を具体的にとりあげたものは、金允植氏の「李光洙의 時代」⁽¹⁷⁾だけであるようだが、たんに書名と作家名を列挙したにとどまり、それを手がかりとして何かを追及したものではない。

しかしながら、李光洙が自己の中学時代を回想するとき、必ず東京での読書内容にも言及しているという事実は、彼がこの時代に人生観を形成するにあたり、読書が大きな役割を果たしたことを物語るものではないだろうか。本稿ではまず李光洙がこの時期、具体的にどんな本を読んだのかを調査し、つぎにその中でも李光洙の心に特に強い印象をあたえたと思われる書物をさぐり、それらの書物から李光洙が受けとったものが、この時期に書かれた作品にどのような形で反映しているかを見ていくことにする。そして最後に、この時期東京で李光洙と世界観を共有していたと思われる洪命憲、そして李光洙や洪命憲と何じ書物に接した魯迅について、簡単にふれることにしたい。

二、読書歴

ではまず、李光洙はこの時代にどんな書物を読んでいたのかを、見てみよう。具体的な書名や作家名があげられている主な著作としては、先に述べた「金鏡」「多難半生の途程」「나의 自叙傳」「나의 告白」のほか、一九二五年、『朝鮮文壇』に発表した中学時代の日記「나의 少年時代—十八才少年이 東京에서 한 日記」(以下「日記」と略記する)がある。この「日記」と「多難半生の途程」、そして序文に「直接関連したこと、見聞きしたこと、接触した人たちのことを書いた」と断っている「나의 告白」は、いちおう事実をそのまま書いたことになっている

もの、「金鏡」「나의 自叙傳」「나」は、自伝的とはいえ創作である。もちろん事実をありのままに書いたという作家の言葉をうのみにするわけにはいかないが、具体的な書名や作家名が、複数の作品に重複してあらわれているものは、それがこの時代の李光洙に強い印象をあたえたものとみてかまわないだろう。

これらの作品から中学時代に読んだとされる書名および作家名をぬきだせば次のようになる。作家名は書名の後部にまとめて記す。(原文のまま)

- a、「金鏡」(一九一五)：「火の柱」「良人の自白」「靈が肉が」「飢渴」「我宗教」「海賊」「天魔の怨」「文界の大魔王」「徳富蘆花、틀스토이、고리키、모파상、李白⁽²⁰⁾
- b、「日記」(一九二五)：「바이런의 伝記」「湖上美人」「失樂園」「破戒」「深淵」「虞美人草」「海賊」「バイロン」「プーシキン」「ゴルキイ」「ゴルキイ短編集」「春」「思出の記」「復活」「アンナカレニナ」「イカモノ」「蘇生の日」「建築師」「自然主義」「天魔の怨」「沙翁物語集」「野の花」「ナポレオン言行録」「詩人の戀」「病問録」「藤村詩集」「靈か肉か」「三四郎」「青い小猫」「私の一夜」「花袋集」「人形の家」「蒲團」⁽²⁷⁾、國木田独歩⁽²⁸⁾
- c、「多難半生の途程」(一九三六)：「카인」「海賊」「마제바」「몬관」「후란의 物語」「亞米利加物語」「新約全書」⁽³⁰⁾、「我輩は猫である」「坊ちゃん」「虞美人草」「三四郎」「文学論」⁽³¹⁾、國木田独歩、夏目漱石、바이런、島崎藤村、田山花袋、틀스토이、木下尚江、⁽³²⁾ 池田、아르케이、바셀、⁽³³⁾ 고리키⁽³⁴⁾
- d、「나의 自叙傳」(一九三六)：「현실폭로의 비애」「카인」「해족」「돈관」⁽³⁵⁾
- e、「나」(一九四八)：五山学校時代の蔵書として次のものがあげられている。

틀스토이의 전집의 영문역 열네권. 푸르게네프, 고리키의 소설이 각각 오륙 종씩.

위고의 《레 미제라블》. 졸라의 《파리》. 셰익스피어, 디킨즈, 스콧의 소설. 밀턴, 바이런, 워어즈워스,

메니슨의 시집. 모파상의 《한 여자의 일생》. 일본 문학 등속. 한문 서적.⁽³⁶⁾
 f, 「나의告白」(一九四八) : 바이린, 夏目漱石⁽³⁷⁾

もちろんこのほかにも、中学時代の読書について言及している文章はある。たとえばトルストイについては、「물스토크의 人生觀」⁽³⁸⁾「杜翁과 나」⁽³⁹⁾(ともに一九三五年)など、この作家だけのために書かれたものもある。ここで取り上げたのはあくまでも、中学時代の読書内容がある程度まとまって出ている代表的なものである。

記憶の正確さという点からいえば、創作小説とはいえ中学卒業後五年しかたっていない時期に書かれた「金鏡」が、一番信頼できるだろう。書名と作家名が一番多くあげられている「日記」は、実際の日記がもとになっているはずであるから信憑性は高いけれども、発表時点で著者によって手を加えられている可能性は排除できない。「多難한 半生の 途程」「나의 自叙傳」で語られている書物や作家は、四半世紀という時間の濾過作用をへていることからして、李光洙の心にもっと深く刻まれたものだと考えられる。だがそれから十二年後に書かれた「나」になると、他の回想とあまりにもかけはなれており、むしろ「こうであったかかった読書歴」と受け取るべき性質のものではないかと思われる。⁽⁴¹⁾「나」は、心情的にはもっとも自己に忠実で露骨な告白録である代償として、事実と異なる要素がきわめて大きな自伝的創作小説である。それがこの読書歴にも反映しているといえるだろう。

李光洙の明治学院中学時代の読書歴には一見して外国文学作品が多い。それらはおそらく日本語に翻訳されたものであったと思われる。李光洙の中学時代の英語の實力についてはさておき、次の表で見ると、李光洙がこの時代に読んだ外国文学作品はすべて、この時期に日本で翻訳出版されているものであり、そのうちのいくつかは、ちょうどこのころ出版されたばかりであること、そのほか、このころ李光洙にさまざまな書物を紹介して読ませていた「文学の指導者」洪命憲の回想からも、そのように推定される。四十年長だが、大城中学一年生のときには同級生だった

洪命憲との交友は、李光洙が明治学院にうつってからもつづき、文学にかんして洪命憲は李光洙の先輩格であった。名門両班の出身で経済的な余裕があった洪命憲は、好きな本ならば発禁本でも買いあさっては、それを李光洙にまわして読ませていたという。⁽⁴²⁾それで李光洙のこの時期の読書は、洪命憲の読書とある程度かさなるとみてよい。その洪命憲が、自分が好んで読んだ外国作品は翻訳本だったと明言している。⁽⁴³⁾こうしたことから、李光洙の読書歴のなかの外国文学作品は、明治末期の東京の書店に回っていた日本語訳であったと考えてよいと思う。

李光洙がこれらの日本文学、外国文学作品をどの版で読んだのかは、当時の日本の出版物を調査することによってある程度特定できる。その結果を以下のように表にまとめた。

- * 国立国会図書館所蔵明治期刊行図書目録第四巻、および安藤美登里編翻訳文学文献総覧—明治時代—(『國文學』第四卷第五号・第六号)を参考にした。
- * 李光洙の記憶ちがいのと思われる書名は、正しいと思われる書名を著者名の下に『』で記した。
- * 一度出てきた作品は既出とした。
- * 「e」「나」に出ている作品は日本語に翻訳されたものではないので、除外した。
- * 作品名だけを対象としているので、作家名しかない f 「나의告白」は表に入っていない。
- * 書名の上の番号と丸印については後で説明する。

読んだ時期	書名	著者/訳者	出版社(「」は雑誌名)	出版年月
a 「金鏡」 中学時代前半 三年秋～四年 (明治41年ころ)	1 「火の柱」 1 「良人の自白」	木下尚江著 木下尚江著	平民社 平民社	明治37・5 明治37・12 明治38・7
		上編 中編		

c 「多難半生」 途程」 中学時代	② 「海賊」 ② 「カイン」 2 「マゼツバ」 2 「ドンファン」 4 「フランス物語」 4 「亜米利加物語」 4 「我輩は猫である」	既出 既出 (「天魔の怨」) バイロン著 木村鷹太郎訳 バイロン著 永井荷風著 『あめりか物語』 夏目漱石著 夏目漱石 既出 既出 夏目漱石 (「鶉籠」所収)	真善美協会 博文館 未詳 博文館 服部書店 大倉書店 春陽堂 大倉書店	明治40・3 明治42・8 明治41・3 明治38・10 明治39・11 明治40・4 明治40・1 明治40・5
d 「ユウ 自敘傳」 中学時代	④ 「現実暴露の悲哀」 ② 「カイン」 ② 「海賊」 ② 「ドンファン」	(前掲長谷川天溪『自然主義』所収) 既出 既出 既出	大倉書店	明治40・5

これらの書物は、次の四つの作品群に分類できる。第一は、キリスト教的理想主義の色彩が濃い木下尚江とトルストイ、徳富蘆花の作品で、主に明治学院中学時代の前半に読んだものである。第二は、中学時代後半に読んだバイロ

ンの作品とその評伝、およびそれとのかかわりで読まれたと推定される作品群で、浪漫主義詩人プーシキンの伝記もここに入れる。第三は、それ以外の外国文学作品である。「野の花」は出版年度の近さを考慮して、こちらに分類しておく。そして第四は、第一に分類したものの以外の日本文学作品である。分類の番号を書名の上につけ、何じ作品が二度以上出てくる場合は、番号を二重、三重あるいは三重丸でかこんだ。すると第一群は九回出てきて、重複をのぞくと八冊、第二群は十八回で十冊、第三群は十二回で十二冊、第四群は十七回で十四冊となる。バイロンに関する第二群がもっとも重複がはげしい、つまり何度もくりかえして回想されているわけである。

ところで、第一群の作品は、李光洙が独自の好みで読んだものだが、第二のバイロンは、後述するように、洪命憲の勧めで読んだものだった。また第三の外国文学作品群のうち、アンドレイエフの「深淵」、「ゴリーキー集」、イブセンの作品など、多くが出版されたその年に読まれているが、出版される本を次々に購入するだけの経済力が当時の李光洙にあったとは思われないし、外国文学特にロシア文学の作品は当時手に入るものは全部集めたという洪命憲の言葉もある⁽⁵¹⁾。これらも洪命憲を通して李光洙が読んだものと考えてよいと思う。第四の日本文学には漱石、藤村、花袋と当時の第一人者が並んでいるけれども、特に体系だてて読んだ形跡はない。藤村と花袋は氣に入らなかったという趣旨の記述が、日記に見える⁽⁵²⁾。ところで「多難半生」途程」の中で李光洙は、長編「無情」執筆のころは漱石を愛読していたが、その漱石の本は中学時代に洪命憲が自分にくれたものだ⁽⁵³⁾と書いている。「我輩は猫である」だけは自分の金で買ったこと⁽⁵⁴⁾わっている。この第四分類の日本文学の中では夏目漱石の作品が一番多いが、それもこのようにほとんどが洪命憲の手から李光洙に渡ったとなると、第二、第三、第四分類の作品の多くは、洪命憲を通して李光洙に読まれたことになる。李光洙の中学時代の読書の大半は、洪命憲の影響下にあったといつてよいだろう。だが、てあたりしだいの乱読の中から、自分の好みにあわせてじょじょに自分の性向にあった分野へと読書範囲をひろげていった四才年長の洪命憲が李光洙にすすめてくれたのは、あくまでも洪命憲が自分の内的要求に応じてもと

めた書物であり、そうした書物に対して李光洙が限定的な反応しか示しえなかったのは当然であろう。日本の自然主義作家の作品やアンドレイエフなどの外国文学作品に、李光洙はあまり興味をしめしていない。そもそも李光洙は自分で語っているように、あまり読書が得意ではなかったのではないか。⁽⁵⁵⁾ 結局、李光洙の性向に一番あっていたのは、自己の選択で読んだ木下、トルストイだったように思われる。洪命憲からすすめられて読んだ書物のうちで、もっとも李光洙の心をとらえたのは、何といってもバイロンであった。

「金鏡」の主人公金鏡は、五山学校での生活によりやく落ち着きを見出したころ、それまでの自分をふりかえって、「自分には『火の柱』と『我宗教』と『海賊』を読んだ東京白金」、そして自分を「健全な朝鮮人にしてくれた五山」という「二つの根拠地」があるのだと考えている。⁽⁵⁶⁾ 卒業後五山学校に赴任した李光洙にとって、明治学院中学とはなによりも木下尚江とトルストイとバイロンを読んだ場所であったことがうかがわれる。ある日学費を受けとって下宿に帰る途中、本屋の店先で目に入った「火の柱」という題名が何となく気になって買って帰り、そのまま読み明かして以来木下の作品に読みふけり、ついには作品の主人公がのりうつつたように不眠症にかかったという金鏡の姿は、おそらく中学三年生後半から四年生のころの李光洙自身の姿であったことだろう。「多難社半生の途程」でも、「私はトルストイを読み、木下尚江を読み、バイロンを読み、ゴリキーを読んでいるうちに中学を卒業した」と述べている。中学時代の読書体験でもっとも印象的であったのは、木下、トルストイ、バイロンの三人であったとみてよいと思う。卒業して五年後に書かれた「金鏡」に木下尚江の作品名がならんでいるのは、そのころの記憶がまだ鮮明であったせいであろう。

三、木下尚江

木下尚江は明治二年松本で生まれ、中学時代クロムウェルに心酔して、弁護士を志し、東京専門学校に学んだ。二

十五才で松本に弁護士事務所をひらき、この年、キリスト教に入信、しかし翌年の日清戦争で教会がとった態度に憤慨して、独自のキリスト教徒となる。普選運動、廃娼運動に専心するが、県会議員選挙にまつわる疑獄事件で監獄に入り、無罪判決で出所ののち毎日新聞入社。日露戦争に反対して開戦直前から戦中にかけて毎日新聞に「火の柱」「良人の自白」を連載し、平民法から単行本として刊行する。だが、戦後は母の死をきっかけに突然社会活動から身をひいて、キリスト教からも離れ、他の宗教へ沈潜していった。⁽⁵⁹⁾

「火の柱」は、キリスト教社会主義者で非戦論運動家の若者を主人公とする社会小説である。「社会の不公平」「腐敗」「凶悪」に挑戦する「熱いまごころ」をもつ「古理想家」の主人公、彼を慕う美しい恋人とそれを引き裂こうとする継母、横恋慕する悪辣な軍人など、登場人物の設定には通俗のきらいがあるが、この小説によって金鏡と李光洙はじめて『主義』の高尚な甘味、『奮闘』への欲望、『恋愛』の醇味⁽⁶¹⁾を知ったという。木下は若いときに北村透谷の「厭世詩家と女性」のなかの「恋愛は人生の秘鑰なり」という一句に「大砲をぶちこまれたような」衝撃をうけたというロマンティストであり、廃娼運動に奔走したことから想像されるように、禁欲的なキリスト教徒であった。そうした清教徒的な恋愛観はこの小説にも反映している。

「良人の自白」は、弁護士である木下自身の経験がおりこまれた理想主義あふれる作品で、主人公の職業や登場人物の構成などに、李光洙が後に書いた長編「書」と類似する点が見られる。⁽⁶²⁾ 「火の柱」と「良人の自白」は日露戦争中から戦後にかけて、平民法より単行本として刊行されて多くの青年たちの心をとらえ、当時まれにみるほどの売れ行きで版を重ねたという。⁽⁶⁴⁾ 李光洙が読んだのはこの単行本であろう。

李光洙が木下の作品を読み耽ったころ、木下はすでに活動の第一線から退いていた。「飢渴」は、木下がまだ活動中に新聞や雑誌に発表した記事評論をまとめて出版したものであるが、その中の「朝鮮の復活期」⁽⁶⁵⁾という日韓新協約(一九〇五)についての評論から、我々は木下の朝鮮観をうかがうことができる。協約締結のさいに韓国民がみせた

抵抗と、閔永煥、その母、および趙秉世の三人の殉国をたたえて木下は、「看よ、韓国民は自国の滅亡を決して袖手傍觀したるに非ざるなり」と書いてある。そして、協約前文で「韓国の富強の実を認むるの時に至る迄此條款を約定す」というが、その「時」を一体的に何を以て判断するのかと、日本政府の野心に疑いを呈し、協約第五条で保証された「韓国皇室の安寧と尊嚴の維持」とは、決して韓国民の安寧と尊嚴のことではないと、「社会主義者」らしい指摘をおこなう一方、以前には韓国の独立を唱道していた人々の豹変ぶりを非難して、日本の世論には「偉大国民の同情心」を見ることができないことを嘆いている。朝鮮に対する木下のこのような態度も、李光洙の心をひいた理由であろう。なお「火の柱」「良人の自白」「靈か肉か」は、李光洙が中学を卒業した年の秋、大逆事件のさなかに発売禁止とされた。李光洙の中学在学時を通じて、これらの作品が日本社会で問題性をもって読まれていたことがわかる。

四、トルストイ

「火の柱」の主人公の、教会と対立する特異なキリスト信仰は、作者である木下自身のものであった。自叙伝「懺悔」⁽⁶⁶⁾によれば木下は「基督山上の説教の條」⁽⁶⁷⁾を読んでその思想に驚愕し、それをきっかけとしてキリスト教に近づいた。しかし、教育勅語が公布されると、博愛主義者であるはずの日本のキリスト者が、反発することなく勅語の国体精神を受け入れ、また日清戦争が始まったときには、それをキリスト教会が「正義の戦争」だと鼓吹するのにシヨックをうけて、教会から心が離れたという⁽⁶⁷⁾。木下のこのようなキリスト信仰は、トルストイのキリスト信仰と通底している。李光洙が小説を通して木下から漠然と得ていたキリスト教的理想に、理論的な根拠をあたえたのが、トルストイの「我宗教」であった。木下と同じような体験をもって、教会に不信感をいだくようになったことを、李光洙は「杜翁斗」⁽⁶⁸⁾で語っている。

李光洙が明治四年ころ読んだと推定される加藤直士訳の「我宗教」⁽⁶⁹⁾は、日露戦争の前年(明治三六年)の出版であるから、李光洙が読んだのは出版から五年後である。日清戦争が終わってようやく戦争に対する自らの熱狂ぶりを反省したキリスト教徒や、トルストイを社会主義者として受け入れていた当時の日本の社会主義者のあいだで、トルストイは日露戦争前後を通じて読まれていた⁽⁷⁰⁾。トルストイの翻訳が本格化するのは日露戦争後のことであり、平和主義者、人道主義者としてのその影響力は、大正時代にかけてますます大きくなっていく。

「我宗教」⁽⁷¹⁾はトルストイが自分なりのキリスト信仰を語ったもので、ある意味では「新たなキリスト教の創造」⁽⁷²⁾とすらいえるものである。難解な聖書解釈と世俗にまみれた教会のせい、実行不可能の真理とみなされているキリストの教えを本来の姿にひきもどすために、トルストイはマタイ伝第五章、山上の垂訓二一節から四八節の五つの戒律を取り出し、これを土台にキリスト教を単純明快に再構成して、信仰とはすなわち実行するものであることを主張した。「悪に抗するなかれ」という無抵抗の戒律を中心に、「怒るなかれ」「姦淫するなかれ」「誓うなかれ」「敵を愛せ」という五つの戒律にトルストイは自分なりの解釈をほどこし、これらを信仰の力で実行することによって「地上に神の王国をうちたてること」を説いたのである⁽⁷³⁾。

木下の小説に心酔していた李光洙が、木下の小説の主人公のキリスト教的理想主義から、トルストイのキリスト教へと入っていくのは、自然ななりゆきであったことだろう。しかし、トルストイのキリスト教解釈をよく読むと、李光洙はトルストイの思想を自分の愛国心とどのように折り合わせたのか、疑問に思われる点が出てくる。「隣人と同じように仇敵を愛せ」というイエスの言葉を、トルストイは、「隣人」とは同国人、「仇敵」とは民族の敵という意味にとる。この戒律はそれゆえ、「他民族に敵意をいだかず、戦わず、戦争に参加せず、戦争のための武装をせず、万人に対し、彼らがいかなる民族であろうとも、自国民に対するような態度をとるべし」⁽⁷⁴⁾という博愛主義と非戦主義を説いた現実的な教えであると解釈して、トルストイは自国のみを愛する愛国心を否定するのである。そして、その愛国心と民族対立を助長するのが、民族や国家に対する忠誠の宣誓であるから、キリストは「誓うなかれ」という戒律に

よって宣誓を禁じたのだとする。トルストイの愛国心を否定するこのような博愛主義を、李光洙は自らの愛国心とどのように同居させたのだろうか。

トルストイは現実には不可能にみえるこれらの戒律の実行も、「われわれやわれわれの子供たちに幼少の頃から言葉や実例によって説かれていたら」⁽⁷⁵⁾、そして「だれもがそれを信じるなら」⁽⁷⁶⁾可能はずだと説く。一人一人が思想と行動を変えることで世界が変わるといふ考え方が、トルストイの思想の根本にあるのであり、この考え方は後の李光洙に大きな影響をあたえている。

しかしながら、小国を圧迫する立場にある大国ロシアの国民であったトルストイが、他民族に対して敵意ではなく愛をもつよう主張することと、圧迫される側の人間が同じ主張をおこなうことは、果たして同じであろうか。李光洙の祖国はいまや日本によってほとんど独立を奪われていた。民族間の差別を否定するトルストイの言葉が、李光洙の心を一時的にとらえたとしても、それが現実の前で何の役にもたたないと気がついたとき、李光洙がトルストイの思想に反発するのも、また当然であったのではなからうか。中学時代の終わりころからトルストイを離れた李光洙は、大学時代にはトルストイに対して否定的な見解をもつようになっていた。上海から帰国してのちの李光洙のトルストイ再受容は、中学時代とは違って複雑で陰鬱な印象をあたえるものである。⁽⁷⁷⁾

五、バイロン

バイロンを知ったために、トルストイ主義者だった自己の内部に大きな葛藤が生じたことを、李光洙は「金鏡」その他で語っている。だが、この中学時代がトルストイの思想だけで終わるはずがなかったことは、今見てきたように当然ともいえることであった。

一九二五年『朝鮮文壇』に発表された「日記」は、中学生活も終わりに近い、明治四十二年十一月から明治四三年二月までの約三ヶ月の記録である。この期間に読んだ本のほかに、明治四二年中に読んだおもな本の題名がまとめて書き出されており、このころの李光洙の読書歴をしるには不可欠の資料である。⁽⁷⁸⁾木下尚江やトルストイに心酔した時期はすでに終わり、バイロンが興味を中心となっていることが、日記の内容からうかがわれる。

隆熙三年十一月七日(「日記」の第一日め：引用者)

(前略)昨夜日兄にバイロンの伝記を読んでやり、遅くなって床に入ったが、午前一時頃寒気で目覚め、激しい性欲で苦しんだ。(中略)僕はバイロンから学んだことが多い。だが彼をまねようとは思わない。(後略)⁽⁷⁹⁾

「バイロンの伝記」が、「金鏡」に出てくる木村鷹太郎の「バイロン文界之魔王」、なのか、それとも「日記」で明治四二年の読書目録にはいっている、民友社十二文豪の号外、米田實の「バイロン」なのか、あるいは同じ目録中にある、西洋の浪漫主義詩人たちの恋を描いた關露香の「詩人と恋」のバイロンの章であるのかは不明である。木村と米田はバイロンを「第二のミルトン」と呼び、スコットとの交流にも触れているし、關露香の「詩人と恋」には、スコットとミルトンの章がある。李光洙が十一月九日から十三日にかけてスコットの「湖上の美人」を、同じ十一月九日にミルトンの「失樂園」を読んでいるのは、そのためであろう。

Hとは洪命憲をさすと思われる。バイロンに言及するとき、李光洙はつねに洪命憲の名前を持ち出しており、その回想の仕方は、李光洙に対する当時の洪命憲の影響力の大きさと、バイロンがどれほど激しく李光洙の心をとらえたかをしのばせる。

「だが造物は彼に安穩たるを許さず、洪という人物をしてバイロンの『海賊』と『天魔の怨』を読ませしめ、安ら

かたりしこの少年の霊を散乱せしめた後に、『文界の大魔王』というバイロンの伝記をかりて、以前『火の柱』で燃え上がった心と同じように、金鏡の胸に炎を燃え立たせた。(中略)それより金鏡は盛んに酒を飲み、異性の愛を求める『バイロニズム』、それでいて正と義の勇士となることを渴望する『トルストイズム』、この正反対の主義が昼夜あい争うなか、洪君は傍観冷笑しながら、ゴリキー、モーパッサンのようなものを吹き込むので、少年金鏡の霊は暴風狂乱に雷雨まで加わり、ほとんど気も狂わんばかりであった。(『金鏡』)

「洪君は私をかわいがり、自分が買った本は必ず私によこして読ませてくれました。バイロンの『カイン』『海賊』『マゼッパ』『ドンファン』などは、我々ふたりの精神を激しく揺り動かしました。」(『多難社半生の途程』)

「K(洪命憲の号^{カイン}、假人のイニシャルと思われる…引用者)という友人にすすめられたバイロンの詩——『カイン』『海賊』『ドンファン』などが、いかに清教徒的生活の浅薄であり、悪魔主義が力強いものであるかを、私に教えてくれたことか…」(『ユウ自叙傳』)

十九世紀はじめの西ヨーロッパの浪漫詩人が、李光洙や洪命憲の心をこれほどまでにとらえたのは、なぜだったのだろう。それを知るためには、まずバイロンが明治の日本でどのように受容されていたかを見ておかねばならない。李光洙たちがバイロンに出会ったのは日本でのことであり、日本語の翻訳によったからである。

* 自由民権運動の盛んだった明治一〇年代、すでにバイロンの詩は英学生のあいだで読まれ、「海」は「奴隸」に対する自由の象徴であるとして、「チャイルド・ハロルド」の「海の歌」の一節が学生の唱歌として歌われていた。⁽⁸³⁾

本邦で最初のバイロン詩の正式な翻訳は、森鷗外らによる明治二二年八月の「國民之友」付録「於母影」である。⁽⁸⁴⁾だが同年四月に自費出版された北村透谷の「楚囚之詩」と、明治二四年出版の「蓬萊曲」⁽⁸⁵⁾には、すでにバイロンのつよい影響がみられる。(透谷は挫折した自由民権論者であった。)⁽⁸⁶⁾「楚囚之詩」が閉じこめられた獄囚をうたった「シオンの囚人」、「蓬萊曲」が自意識に囚われる主人公を描いた「マンフレッド」を下敷きにしてることからわかるように、透谷がバイロンにひかれたのは、現実と自我の牢獄に閉じこめられた近代人の苦悩に対する共感であり、きわめて厭世的で憂鬱な色彩が濃かった。李光洙が明治四二年に読んだ島崎藤村の長編「春」は、藤村が自己の苦悩にみちた青春と、自殺する友人透谷を描いた自伝的作品である。その中に、ある朝二人がバイロンの「海の歌」を詠って泳ぎにいく場面がある。⁽⁸⁸⁾バイロンの「海」は明治二〇年代の鬱屈した若者たちにとっても、明治二〇年代とは違う意味で自由の象徴であったのだ。

だが明治三〇年代の浪漫主義者のバイロン受容は、たとえば与謝野鉄幹の有名な「人を戀ふるの歌」⁽⁸⁹⁾が代表するようには、厭世的な面よりも、情熱的な感傷や、力づく男らしい面が強調された。日夏耿之助は「バイロン、ハイネと一口に云はれた此二人の浪漫詩人が如何に青年憧憬の的になってゐたか、この一篇の口吟歌を歌へば、坐るに今の中年の男子は、昔の心花やかなりし、明治三十年代浪漫期に人となった頃を回想するの念に耐へないものがある」と書いている。バイロンが日本でもっとも読まれたのは、「詩歌と評論の時代」といわれる、この明治三〇年代である。伝記も、米田の「バイロン」が三三年、關露香の「詩人と恋」が三四年、そして木村鷹太郎の「バイロン文界の大魔王」が三五年と、たてつづけに出版された。木村は三六年に「バリスナ」、三八年に「海賊」、四〇年に「マゼッパ」「天魔の怨」を刊行した。同年、児玉花外による「バイロン詩集」も出ている。

しかし日露戦争後にあらわれた自然主義が、明治四〇年代に入って文壇を席卷し、浪漫主義が反自然主義としてネオロマンチズムや理想主義などに変形してゆくとともに、一時は「バイロン熱」などまでいわれた、日本文学にお

けるバイロンの影響も終焉した。むしろその後のバイロンは、それまでの反動でもあるかのように、あまりに急激に忘れ去られた感がある。

洪命憲と李光洙は、明治三〇年代に出版されたこれらのバイロンの詩と評伝を、自然主義が全盛であった明治四〇年代初めに読んだわけである。日本で最初に読んだのが、真山青果や正宗白鳥の自然主義小説であったという洪命憲は、のちに当時の自分の読書傾向を回想して、こうに語っている。

「当時は自然主義がおおはやりのころだ。で、僕の読書過程は自然主義から浪漫主義へさかのぼった。日本文学も自然主義から浪漫主義にいったのだから、僕の読んだものは日本文学史とまったく同じだったことになる。」⁽⁹²⁾

西洋の文学史では自然主義は浪漫主義のあとに来るので、洪命憲は自分の読書過程がその反対であったことを、「さかのぼった」と言っているのであろう。「日本文学も同じだった」という洪命憲の言葉は、当時の日本文学の状況がある意味でよくとらえている。

たとえば中村光夫は、この時期の日本文学の状況を次のように説明している。

「明治末年の文学界の特色は、これまで述べてきたように、いわゆる自然派と反自然派の併立、共存の状態にあります。「蒲圃」の書かれたのが、明治四一年(一九〇七年)、『スバル』の創刊が四二年、『白樺』のそれが四三年とすると、自然主義が無条件で新文学の代表として評された時代はわずか二年ほどということになりますが、自然派と、これに反対したとされる耽美派あるいは白樺派の間に、明確な思想的対立があったかという点、それはなかったという方が正しいのです。」⁽⁹³⁾(傍点引用者)

明治四二年に創刊された『スバル』は、その前年に終刊した明治三〇年代浪漫主義を代表する雑誌『明星』の後身である。明治三〇年代末にあらわれた自然主義は、あつというまに浪漫主義を圧倒したが、浪漫主義はその自然主義に反発するようにネオロマンチズム、耽美主義あるいは理想主義へと形をかえて自然主義と併存していた。自然主義の全盛期である明治四一年ころから日本文学の流れにとびこんだ洪命憲には、自然主義のあとに頹廢的な浪漫主義があらわれたように見えたはずであり、それはまた、白鳥や青果を読んだあとで、バイロンやワイルドを好むようになった洪命憲自身の読書過程と軌を一にしていたのである。⁽⁹⁴⁾

李光洙は同じころの日本思潮を、次のように回想している。

「そのころ東京は日露戦争直後で、自然主義がやはり、悪魔主義的思潮が蔓延していた時期で、これは文学においてだけでなく、実践にまでひろがりました。」⁽⁹⁵⁾(『多難半生の途程』)

「このとき私の清教徒的な生活を転倒させたのは、当時東京(おそらく全世界)を席卷していた自然主義文芸とバイロンの詩であった。」⁽⁹⁶⁾(『ゴウの自叙傳』)

後述するように、木村鷹太郎は「バイロン文界之大魔王」でバイロンの文学思想を解説して、「悪魔主義」という言葉を使っている。その背徳的な作風からバイロンは、本国で悪魔派(The satanic school)と称された詩人であった。⁽⁹⁷⁾谷崎潤一郎が日本文壇で「悪魔主義」を標榜して脚光をあびたのは、李光洙が帰国した直後のことであり、李光洙の読書歴にその名はみえない。⁽⁹⁸⁾李光洙が「悪魔主義」と呼んでいるのは、木村が使用した意味におけるバイロンの思想と考えてよいと思う。これらの回想からすると李光洙は、浪漫主義者バイロンと日本の自然主義を同列にみなしてい

るようである。このことは一見不思議に思われるが、日本における浪漫主義と自然主義の関係を詳察するならば、かならずしも李光洙の思い違いといいきるわけにはいかない。

中村光夫のいう「自然派と反自然派との間の明確な思想的対立」がなかったのと同じように、日本では浪漫主義と自然主義の間にも完全な対立はなかったのである。周知のとおり藤村は詩人として出発し、花袋は長いあいだ「少女病」や「野の花」のようなセンチメンタルな作風からぬけだせなかった。明治四〇年に花袋が自己の内面を赤裸々に描いた小説「蒲圃」を発表したとき、数年前なら問題にされなかったであろうこの作品が、当時の文士たちに真面目に受け入れられたことを回想して正宗白鳥は、「日露戦争後のあの頃は、心あるものは自我にめざめんとしたのだ」と語っている。明治四三年、魚住影雄が評論「自己主張としての自然主義」のなかで、自然主義とは「自己拡充の精神の一発現」であると分析したごとく、日本では近代的個人の自覚と自己表現は、初期浪漫主義をひきついた自然主義によって確立されたのだった。「現実暴露」「露骨描写」とは自分自身の正体を目をそらすことなく直視し、ありのままの姿で表現したい自己確認の欲求であり、自我主義の一形態にほかならない。

魚住がこの評論のなかで、日本の自然主義とは「国家」および「国家の歴史の権威と結合して個人の独立と発展とを妨害している」「家族」という二つのオーソリティに対抗するために、拡充を意志する自意識の盛んな精神と、科学的という名目で現実をそのまま受け入れる宿命論的精神とが、「奇なる結合」をとげたものであると書いたことに對し、石川啄木は「時代閉塞の現状」で、「我々日本の青年は未だ嘗て彼の強権に對して何等の確執を醸したことが無いのである」と反論して、日本自然主義における社会的視点の欠如を指摘した。「家」の重さに苦しんだ啄木が、「家族」というオーソリティのほうには反論していないことは興味深いが、この論争が我々に提起するのは、自己拡充がつねになんらかの「オーソリティ」と確執をかもすものであるなら、当時の李光洙たちが対立した「オーソリティ」とは何であり、また何であるべきだったかという問題である。朝鮮近代文学には「家」との確執がみられないと

よく指摘されるが、このこととも関連して、朝鮮文学における「オーソリティ」の正体はつねに問題とされるべきであらう。ある意味で日帝という「オーソリティ」は、朝鮮内部の「オーソリティ」を隠蔽する役割を果たしたともいえるからである。だがこの問題については、本稿では提起にとどめて論を進めたい。

啄木は、自然主義が「自己主張」であるという魚住の見解には同意し、明治青年の自己主張の第一声は、「既に自然主義運動の先蹤として一部の間認められてゐるごとく、樽牛の個人主義」であり、第二の経験は梁川が代表する「宗教的欲求の時代」、そして第三がすなわち「自己主張の強烈な欲求」である現在の自然主義であると述べた。明治三〇年代を代表するこの二人の浪漫主義評論家高山樽牛（一八七二—一九〇二）と綱島梁川（一八七三—一九〇七）の著作も、李光洙は読んでゐる。梁川の著書「病問録」は「日記」の明治四二年の目録のなかにあるし、読書歴にはみあたらない樽牛も、筆者の推測では少なくともその代表的評論「美的生活を論ず」を読んだことは間違いない。自分分は一時「本能満足主義者」であったと、「余の自覚する人生」で李光洙は語っている。「幸福とは何ぞや、吾人の信ずる所を以て見れば本能の満足即ち是のみ」と樽牛が「美的生活」で用いたこの言葉は、彼の死後も流布しつづけ、自然主義があらわれると、新聞などで自然主義の思想をさして使われるようになり、自然主義とは反道徳的な考え方であるとの社会通念が生じた。そのために長谷川天溪は「自然主義と本能満足主義との別」を書いて、自然主義とは文芸上の問題であり、本能満足主義とは人生上の実行問題であると弁明をしたほどである。文学年表をみると、明治四〇年の欄には「自然主義一世を風靡す」とあり、四一年には「自然主義全盛」、同時に「類魔的思想みなぎる」とある。「多難半途程」で、自然主義が文学においてだけでなく実践にまでひろがったと李光洙が回想しているのは、当時のこうした風潮をいうのであらう。李光洙の記憶のなかで自然主義とバイロンが同列におかれているのは、人間の眞の姿を動物的な面まで含めて追及する自然主義の自我主義の側面と、神を冒瀆するほど強大な自我をもつ人格を創出して、自国の社会から悪魔と呼ばれたバイロンの自我主義を、同時期に、同じものとして受け取ったためだ

と考えられる。

バイロンは一七八八年ロンドンで生まれた。祖先がスカンジナビアの海賊だったといい、祖父ジョン・バイロンは航海者、探検家で知られた海軍提督で、バイロン自身も海洋を愛したという。二十一才で東方に旅立ち、帰国後その見聞をもとに「チャイルド・ハロルドの遍歴」を書いて、一躍社交界の寵児となり、このころ「海賊」を書くが、奔放で背德的な作風と女性関係が社会の攻撃をよび、結婚にも失敗して、一八一六年、ついに永久に英国を去ることになる。その後はヨーロッパ大陸をさすらいながら多くの著作をなした。「カイン」は一八二二年にイタリアで書かれている。最後はギリシャの独立戦争を助けて、一八二四年、三十六才にしてミソロンギで客死した。

李光洙に最も強い印象をあたえたというバイロンの作品「海賊」と「天魔の怨」の内容は、次のようなものである。「海賊」の主人公コンラードは、意志強固で服従を嫌う尊大な性格の所有者である。そのために他人に欺かれて人間に失望し、憎悪と復讐の心をもって人間の社会と神を棄て、海上に自分の帝国をつくり、いっさいの道徳から自由に生きている。だがその彼も、妻のメドラだけは熱愛している。ある日ザイド・パンシャを襲撃して逆に捕虜となるが、略奪のさなかでコンラードに救われたザイドの妻グレンナレーはコンラードに恋し、ザイドを暗殺する。二人が逃亡し、家に戻ってみると、最愛の妻はコンラードが殺されたと思ひこんで、すでに自殺していた。絶望したコンラードは、グレンナレーを連れてどこへともなく姿を消す。

「天魔の怨」は、創世記にあるカインの弟殺しに材を取った劇詩で、友人ウォルター・スコットに捧げられている。知恵の実を食べたために楽園から追放されたアダムとエバは、楽園の外でカイン、アベル、アダ、チラをもうけ、カインはアダと、アベルはチラと夫婦になって、働いて生きている。弟のアベルは父母や神に対して従順だが、兄のカインは自分が生まれる前に父母の犯した過失のせいで、何の罪もない自分が「労働」に苦しみ、「死」を恐れなければならぬことに不満である。そこにルシファーがあらわれる。真実の知識をえたいと願うカインに、ルシファーは自分に従えば与えようという。カインは神にも悪魔にも膝まづくつもりはないと拒否するが、ルシファーはそれこそが我に膝まづくことだと言って、カインに宇宙と冥府、地球の過去と現在の姿をみせてくれる。地上に戻ったカインがアベルとともに神に供え物をすると、アベルの供えた血なまぐさい犠牲の小羊の煙は天にうけいれられ、カインの供えた平和な大地の実りである果実は地上に撒き散らされる。怒って祭壇を壊そうとしたカインは、それを押しとどめるアベルを誤って殺してしまい、母親エバの呪いをうけてアダとともに去って行く。

この二つの作品がなぜ、あれほど激しく李光洙の心をとらえたのか、それを知るための手がかりは、バイロンの著作にもまして金鏡¹¹李光洙を悩ませ、心に炎を燃え上がらせたという、木村鷹太郎によるバイロン評伝「バイロン文界之大魔王」にあると思われる。東京帝国大学出身の翻訳・評論家木村鷹太郎（一八七〇～一九三二）は、高山樗牛の友人であり同志でもあった人物で、井上哲次郎、樗牛らとともに日本主義をとなえ、明治三〇年に雑誌『日本主義』を発刊している。樗牛はこのとき『太陽』の主幹として自誌に「日本主義を賛す」を書いて『日本主義』を側面から擁護し、日本主義の論客として活躍したが、その数年後、死期の近づいたところから極端な個人主義に移行してニーチエ礼讃と「本能満足主義」をとなえ、最後は日連と法華経に傾倒していった。このような樗牛の変貌の淵源は、処女作「滝口入道」にあらわれているように彼が生来のロマンチストであり、また自我の自由をもとめる個人主義であったところにある。樗牛の日本主義とは、国家を功利的に個人の幸福実現の手段とみなす、個人主義をつよく内抱した浪漫的國家主義であった。「人生の目的は幸福にあり」という大前提は、「日本主義を賛す」でも「美的生活を論ず」でも変わっていない。

その樗牛の友人である木村の書いた「バイロン文界之大魔王」は、きわめて思いいれの多い主観的なバイロン評伝である。日夏耿之助によれば、「当代詩人の女性的なるを叱咤せんために特にバイロンの男性的なるをたたへた」も

ので、「要するに木村のバイロン観」にすぎないというが、刊行当時は一部の争つて求めるところとなつたという。後述するように、明治四二年(一九〇九)まで七年間日本に滞在していた魯迅も、この書を読んで、自分の評論の材源としている。

評伝は全部で十七章、四編と余論からなる。第一、二編と四編はトマス・ムーアのバイロン伝によつたとされるバイロンの伝記、途中の第三編がバイロンの「思想、文学、哲学」に対する木村の解説で、最後の余論も木村の「バイロンの人物及び文学批評」となっている。重要と思われるのは木村がバイロンの思想を解説した第三編なので、その目次を以下にあげる。

第三編 バイロンの思想、文学、哲学

- 第八章 天地観及び自我論
- 第九章 不平等及び厭世
- 第十章 人道と耶蘇との衝突
- 第十一章 快樂主義
- 第十二章 女性及び愛戀觀
- 第十三章 道德觀
- 第十四章 海賊及びサタン主義

木村のバイロン観を非常にかいつまんで述べれば次のようになる。

バイロンの天地観は、「山も、波も、また大空も皆な我れ及び我精神の一部たること、猶ほ我は彼等の一部たるが如きに非ざるか」というような、自然をも自我の中に包容する浪漫的な天地観である(第八章)。そのような強大な自我、強大な意志の所有者である英雄、天才は、必然的に神という存在と衝突するし(第十章)、また、「強者或は多数たる社会が、一個人に対して『しかあれ』と命令する所のもの」にすぎない狭隘な道德が支配する人間の社会では受け入れられず(第十三章)、その不平はマンフレッドのような死にいたる厭世(第九章)、サルダナパルスやドンファンのように世俗道德を「苦痛の生命は…快樂の一日に劣るものなり」と嘲笑する快樂主義(第十一章)、あるいはルシファール、カインやコンラードのような神と社会への反抗と復讐(第十、十一章)、またプロメテウスの「義侠」(十二章)へと向かうことになる。バイロン自身の「不平哲学」は、彼をさまざまな方向へと駆り立てたのち、ついにはギリシャ独立戦争における「義侠」の死へと導いた。

このように第三編では木村のバイロン観が、たがいに有機的に関連づけられた、さまざまな面から解説されている。そして、各章で語られたバイロンの思想を最後に「海賊」と「カイン」の二つの作品に集約させてまとめたのが、第十四章の「海賊及びサタン主義」(文中では「悪魔主義」という言葉も用いている)である。李光洙がバイロンの作品の中でもっとも印象的だったというのが「海賊」と「カイン」であるのは、木村のこの「海賊及びサタン主義」の章と無関係とは思われない。

それでは木村によれば「権力世界の真相を啓示し道德の實性を明かにせんとするバイロンの哲學思想」であるという、「海賊及びサタン主義」とは何か。

「海賊主義」は「海賊」の主人公コンラードの生き方をいう。「強大な意志を以て海賊の首魁となり、部下の衆心を歸服せしめて海上に一帝国を作り、海を以て領土となし、意の向ふ所に出没するコンラードにとっては「剣力」が「権利」である。強者あるいは多数のための道德が支配する社会から逃れ、自己の力のみを信じて大海で生きる海賊

の生活こそ其の自由であると、木村は言う。

「海賊の情態豈これ眞の自由に非ずや。彼の平凡の生活に満足し、好みて社會の法規に束縛せらるゝ者の如きに至りては未だ眞正の自由を知らず、又自ら奴隸となりて悟らざるなり。」⁽¹⁰⁾

この文章は、李光洙が中学時代の終わりに書いた「今日我韓青年斗情育」(以下「情育論」と略記する)の一節を想起させる。

「現在の我々の状態を観察するに、上下貴賤をとわずいゆる義務だ道德だと、社會の一時的制裁と公衆の面目に左右されるところとなり(中略)、社會制裁の奴隸となつて(後略)」⁽¹¹⁾

「日記」によれば「情育論」は、明治四一年十二月三日に書かれた。同じく「日記」によると、これより九日前の十二月一四日の夜十時、下宿の二階から火事を見た李光洙は「ああ、壮快だ!」と叫び、ローマの暴君ネロと、バイロンのことを考えている。この時期の李光洙がどれほどバイロンに心酔していたかが想像される。

李光洙が「情育論」において、社會倫理の慣習的支配こそ人間の内部の檻であり、その支配下にある人間は奴隸だと言っておきながら、現実の朝鮮社會の支配倫理である儒教との対決はおこなっていないことを、「李光洙の自我」で筆者は指摘した。その原因は、「情育論」がこのような状況、すなわち日本留学中に、木村のバイロン観によるバイロンに触発されて書かれたことであつたと思われる。祖國を離れ、すでに五年ちかく日本に滞在していた当時の李光洙にとつて、祖國の現實は遠いものだつたに違いない。貧しい祖父と妹しか残されていない彼には、家族という媒体に

よつて祖國の共同体との結びつきを継続させ、休暇ごとに祖國の現實感覺を再確認することも、困難だつたことだらう。李光洙が祖國の現實とであうのは、卒業後、五山学校で教師生活を始めてからのことだ。そこで彼は、東京白金の中学生生活を「四疊半の空中樓閣」⁽¹²⁾だつたと回想することになるが、その樓閣こそは、李光洙の文學の出発点であり、礎石だつたのである。

つぎに「悪魔主義」は、「カイン」に登場するルンファアの哲学である。「ルンファアとは『バイブル』中の悪魔にしてまたサタンと称す。始めエホバ神の前に在りて、天界第一等の天使なりと雖、一旦大望を起し天上に在りて反亂を企て、敢て神命に抗抵し、其徒党を集合し、エホバの天を奪ひて自ら之に君臨せんとし、大に天上に戦ひたり。然るに不幸にして戦敗れて天上より陰府に墜され陰府を以て本據となす。これイスラエルの傳説なり。」⁽¹³⁾ミルトンはこの伝説をもとに「失樂園」を書いた。

明治四二年十一月九日の「日記」には、「失樂園」の説後感想がある。

『失樂園』を読む。よい。魔王の不屈の勇氣は僕のもつとも愛するところだ。残念なのは、なんで一挙に上帝の宝座をつかずに、ぐずぐずとエデンの女なんかを騙していたのか。⁽¹⁴⁾

ミルトンの魔王もバイロンのルンファアも、力においては神に破れたことを認めながらも精神では神との対等を主張する、強大な意志の所有者である。

カインが、ルンファアの傲慢さに対して、

「汝此傲慢なる言語を為すと雖、汝は尚奉戴すべき上位者を有せるに非ずや。」⁽¹⁵⁾
となじると、ルンファアは答える。

「否、我天地に誓て否と言はん、我は實に我に勝ちたる強者を有せり、然りと雖奉戴すべき上位者は之を有せず。」⁽¹⁶⁾
意志の強大なものは力において破れても、精神においては屈することなく反逆をつづけ、復讐を企図する。それは神

と悪魔の二元論の世界である。「兩者同時に支配せんとする」存在である神と悪魔は、「天上」で、「陰府」で、「空間」で、「無限の時間中」⁽¹³⁾において戦い続ける。

ダーウィンの「種の起源」が世に出たのは、「カイン」が書かれた三十八年後の一八五九年である。ルシファーがカインに過去に地球上に存在した生物の幻影をみせ、地球上には人類以前に神の恣意によっていくとも生物が生まれては滅びたことを説明する場面は、バイロンが「カイン」の緒言でことわっているようにフランスの古生物学者キュビエの激変説の適用であり、時間にもなる変化認識ではあっても、進化論的な時間感覚ではない⁽¹⁴⁾。だが、なにゆえに人間はたたかわねばならないのかというカインの問いに対して、アダムたちが禁断の実を食べて以来、人間には戦いと死と病と苦痛と不幸という神の宣告が下されたのだというルシファーの説明には、ダーウィン以前すでにイギリス社会に存在していた生存競争的思想をみる事ができるし、神と悪魔のあいだに永遠に続く闘争もその反映と考えることはできる⁽¹⁵⁾。そしてバイロンのこの二元論的世界観を、帝国主義の時代である二〇世紀の初頭、木村鷹太郎はきわめて明快に進化論の生存競争と結びつけ、優勝劣敗の「力の論理」として受け取ったのである。

「彼れ勝利者として敗北者たる我を悪と云ふと雖、我若し彼れに勝ちしとせば、彼れの事業は悪となり、善惡所を代ふべきのみ」⁽¹⁶⁾

という、ルシファーの言葉に木村が見出すのは、「善惡強弱に由て判し、勝敗に由て定まる」という権力哲学である。しかしながら、木村がバイロンの文学から引き出したのは「力の論理」だけではなく、同時に「力の論理」が究極化して転換された、浪漫主義的な「意志の力の論理」でもあった。

「世界は優勝劣敗の戦場なり、弱者の強者に制せらるゝは止むを得ざるの必然なり」⁽¹⁷⁾
「知るべし強者は弱者に対して一義務なく、弱者は強者に対して一権利なきことを」⁽¹⁸⁾

と主張する木村はまた、次のようにも言うのである。

「強者に対しては弱者まったく権利なし。然りと雖必ずしも強者の意志を奉せざる可からざる義務もなし」⁽¹⁹⁾

力で神に負けたルシファーには、地獄に墮されたことを不当だという権利はない。しかし、だからといって神の正義をすなおに受け入れ、その意志に従う義務もないのである。ルシファーは、神に対抗してエバやカインを誘惑する。反逆という行為の中にしか、「強大な意志」は発現しないからである。こうしてまさに「永久に」闘争はやむことがない。悪魔が、神の支配を認めながら反抗を続けるのは、いつかは自分が力において神に優ることを想定しているからだ。いつかその時がくれば悪魔は支配者となり、自分が神の座にすわって神を地獄に突き落とすことだろう。強者に対して権利なきことを知る神は、それを正当として受け入れ、以前の悪魔と同様、「強大な意志」をもって反逆を続けるだろう。世界は力による戦いの連続であり、勝者も油断すれば敗者に転落する。ただ「強大な意志」をもつ者のみが、生き残るのである。悪魔が「強大な意志」をもった敗者なら、「強大な意志」をもった勝者は神である。それならば「強大な意志」をもった支配者、压制する強者、すなわち「暴君」も、否定さるべき存在ではない。聖書のエピソードが示すように、神はときおり暴君としてあらわれる。他人を自分の欲望の犠牲となすことは力をもつものの特権である。(「暴君の压制はこれ暴君の特権なり」⁽²⁰⁾) だが、同時に反乱者にも反逆の特権があるのだ。(「之を王座より引き降して取て之に代るも亦人の権利なり」⁽²¹⁾) 強者の压制も、反乱者の反乱もその哲学は同じであって、ただ「強大な意志」であるというのが、木村によるバイロンの権力哲学である。

「バイロン暴君に同情を表し、暴戻を権力的に許容せり」として、木村はマンフレッドの一節を引用している。

「暴君囚虜となりて王座より引き墜され、一人獄中に呻吟し、人亦之を忘却す。我れ(運命)彼れの眠りを醒まし鐵鎖を破り、衆を集めて彼をして暴君たらしめたり」⁽²²⁾

「情育論」を書く二十日前、明治四十二年十二月三日の「日記」に、「『獄中豪傑』という詩を『大韓興學報』に送った」⁽¹⁰⁾という記述がみえる。散文詩「獄中豪傑」もまた、バイロンに心酔しているこの時期に書かれたのである。

「獄中豪傑」とは人間に捕われ、鉄の鎖に縛られて檻に閉じこめられた梟である。最初のうちこそ以前の誇りを失わず、自分を嘲弄しようとした人間に襲いかかって脳漿を砕くような激しい抵抗をみせた梟も、人の手から死肉をえながら命をつないでいるうちに覇気を失い、ついには犬のように「奴隸に自安する」生活に陥ってゆく。作者はその梟にむかってかつての自由な生活を喚起し、眠りから醒めよ、反抗せよ、奴隸になるくらいなら死ね、と煽動する。

狭い獄に閉じこめられ、太い鉄鎖につながれて呻吟する梟の凄惨な姿は、いまや独立をほとんど奪われた大韓帝国の象徴であり、梟に対する作者の呼びかけは、自分を閉じこめているものと闘うことによって、自己内部の檻である奴隸根性を打破せよという煽動であるが、それと同時に梟は、解放と拡充を求めてもがく李光洙の自我をあらわすものであったと、筆者は「李光洙の自我」において指摘した⁽¹¹⁾。

だが、なぜ李光洙は「獄中豪傑」の主人公を梟にしたのだろうか。たとえば半年あとに書かれた詩「吾」の主人公が熊であるのは、熊が神話にも登場する、朝鮮となじみの深い動物であることを考えれば不思議ではない。性質が愚鈍であるため、猟師が熊の通り道に岩をおいておくと、その岩に頭をぶつけるといふ、詩の内容と同じ伝承もあるという⁽¹²⁾。原文で *부엉이*、フクロウは肉食で性質の猛々しい鳥である。漢字でも、えものを木に突き刺す習性から「鳥」と「木」を組み合わせてできたという「梟」の字は、罪人の首をさらす「梟首」という言葉をつくり、音が「強」に通じることから、「梟悪」「梟雄」などの言葉をつくる⁽¹³⁾。まさに「暴君」のイメージをもった語である。李光洙が散文詩「獄中豪傑」で主人公を梟に設定したのは、木村が引用したこの一節の、獄中で鉄鎖に縛られて呻吟する暴君のすがたから詩想をえたためではなかったろうか。李光洙の読書歴の中に「マンフレッド」はない。木村訳による「マンフレッド」が出たのは、大正一二年のことである⁽¹⁴⁾。また万一李光洙がこの書を英語で読んでいたとしても、この一節は

挿話的なもので、格別に印象的なものではない。李光洙は「獄中豪傑」の想を、木村が「バイロン文界之大魔王」に引用したこの一節からえたのだらうと筆者は考えている⁽¹⁵⁾。

このような仮定のもとで「獄中豪傑」を読みなおし、閉じこめられた梟に「獄中に呻吟する」暴君の姿をかさねあわせてみると、「獄中豪傑」の梟にはもうひとつ違った貌がみえてくる。

閉じこめられているときは反抗の炎を燃やしつづけ、命をかけて自己の自由のために闘った獄中の豪傑は、いったん鎖をひきちぎり、檻を壊して外に出たときにはどうなるであろうか。人間に復讐し、また自分よりも弱いものを圧倒することに躊躇しない暴君となるであろう。悪魔がいつか神の座につけば、神を地獄に墮とし、自分の善をすべて天使と人間におしつけるであろうと同様に。そして「強大な意志」をもつものは反抗しながら復讐を企図して闘いつづけ、それを持たぬ弱者は強者に抑圧されて、つねに奴隸でありつづけるだろう。ここにあるのは果てしない闘争の世界である。「劣者の心情眞に憐れむべし。されども亦如何ともするなし」と、木村は冷たく言い放っている。

こうした優勝劣敗を前提とするバイロン評伝を書いた木村の脳裏にあったのは、「実に歐米基督教國の人民は文明なりと誇れりと雖も、其内部は破裂せん計りの欲望に充てるなり、唯それ欲望あり、之を以て強大たるなり」という⁽¹⁶⁾列強欧米人にたいする凄まじいまでの警戒感であった。生存競争が人種の戦いに結びつけられ、帝国主義は民族膨脹のもとたらず必然的な結果であるという、当時の一般の認識が、木村のこの危機意識に反映している。

日本主義者木村がこのようなバイロン紹介をおこなった時代背景には、日清戦争後の三国干渉があった。弱小国の悲哀をあげわっている日本国民に対し、国の大小とはかわらない壮大な気概、「強大な意志」をもつようにと木村はバイロンを精力的に翻訳し、また「バイロン文界之大魔王」を書いたのだと思われる。列強の束縛をはねかえし、小国日本が大国ロシアを相手にたたかうためには、まずそれだけの精神的な力と結束力が国民に要請されていた。そうしてみると「木村とバイロンの奇妙な握手」⁽¹⁷⁾が、日露戦争の熱が冷めるとともに急激に色褪せていったことには、

それなりの理由がある。日露戦争で一応の勝利をおさめ、朝鮮の植民地化に成功し、列強の仲間入りをしたと自認した日本には、抵抗のための「強大な意志」は必要がなくなったのである。そして暴君であるための「強大な意志」などが、表立って歓迎されるはずはなかった。

「強大な意志」が、压制する側にも压制される側にも同様に有効であるとしても、より鋭敏に反応するのが压制される側であるのはいうまでもない。日本に留学していた洪命憲や魯迅が、木村のこの書をみのがさなかったのは、その意味で当然であったといえるだろう。

六、洪 命 憲

李光洙にバイロンをすすめて読ませた洪命憲は、一九一八年十一月、『朝鮮日報』に「林巨正伝」の連載を始めている。連載は一九四〇年まで中断を重ねながら続き、結局未完で終わった。白丁(白丁、ハクチョン)という階級に生まれ、運命に反抗して火賊の首領となり、社会と隔絶したところに盗賊の世界をつくる林巨正には、海賊コンラードの面影がある。反逆心に燃えている青年時代と、暴君として君臨する後半とは、林巨正の人格がまるで別人のように変わっていることが指摘されているが、その変化は、あたかも鎖に束縛されていた反逆の梟が、檻を蹴破って舞い上がり暴君に変貌したようなものであって、東京で李光洙と「獄中豪傑」の世界を共有した洪命憲にとっては、主人公の性格の統一はとれていたのではないだろうか。

鳳丹編「二つの家」の章に、象徴的な場面がある。林巨正の父親トルは屠殺白丁に婿入りし、ある日屠殺場を見にゆく。白丁たちにひかれてきて屠殺される従順な牛たちの姿は、うちつづく土禍の中で王の命令とあらば逆らってもせずに殺されてゆく両班たちと、その両班にどれほど過酷に搾取されても抵抗をしらぬ農民たちの象徴であろう。自分より体が小さく力も弱い人間に反抗もせずに殺される無気力な牛は、殺されるのが当たり前だと考えて、トルは少し

も同情しない。それどころか、解体された牛の血に手を濡らした彼の内部からは得体のしれない荒々しい力がつきあげ、トルは思わず妻の白い頬を撫でるのである。ここで我々は、「獄中豪傑」の次の一節を思い浮かべないわけにはいかない。

「その大きな体と力にもかかわらず、面壁につながら、人間の命令どおりに寝起きし、食い働き、(中略)尿と糞をするほかは自由なき、馬と牛!」

林巨正は父のこの性格をそのまま受け継いだ。火賊編「笛」の章で、巢窟に連れてこられた八人の両班のうち、林巨正が殺さなかったのは、決して膝まづこうとしなかったハン生員と、巨正にむかって、どうせなるなら義賊になれと、堂々とさとしたシン進士だけだった。強い意志をもつ人間に対する巨正の共感は、神にも悪魔にも膝まづくつもりはないというカインの言葉を喜んだルシファーを連想させる。このような場面が、我々に「林巨正」の作者が東京で李光洙と「獄中豪傑」の世界を共有していたことを思いおこさせるのである。

七、魯 迅

一八八一年に生まれた魯迅は、一九〇二年(明治三五年)から七年間、日本で留学生として過ごした。来日の翌年から文章を書きはじめ、一九〇四年に仙台医学専門学校に入学するが、一九〇六年には退学、一時帰国して母の命による結婚をしたあとすぐに再び来日し、一九〇七年に文芸雑誌『新生』の出版を計画して失敗、この年、「人の歴史」「科学史教篇」「文化偏至論」「摩羅詩力説」、翌年に「破悪声論」を著している。翌一九〇九年にはロシアと東欧の小説を翻訳して「域外小説集」二巻をだしたがまったく売れず、その年帰国した。

魯迅が一九〇七年に著した評論「摩羅詩力説」の摩羅とは、インドの言葉で悪魔を意味し、中国では「天魔」、ヨーロッパでは「サタン」という。バイロンにはじまり、シェリ、プーシキン、レルモンツフ、ポーランドのミツキエヴィッチ、スウォヴァツキ、クラシンスキ、ハンガリーのベテーフイなど、「反抗と行動に根本意義を求め、世間からはあまり喜ばれなかった」バイロン系譜の「悪魔派詩人」たちの、思想と行動を顕彰したもので、バイロンにかんする部分は、先述の木村鷹太郎著「バイロン文界之大魔王」および木村沢「海賊」を材源にしていることが、中国文学研究者の手によって明らかにされている。

魯迅がこの評論を書いた意図は、悪魔派詩人の詩がもつ、「雄叫びを挙げて、その国民に生氣を吹き込んで立ち上らせ」る力により、祖国の国民の「精神を改造すること」にあった。彼の仙台医学専門学校退学には、その理由となつた有名なエピソードがある。ある日学校でみた幻燈がきっかけだったという。日露戦争中の一光景で、ロシア軍のスパイとして日本軍に処刑されようとしている中国人を、おおぜいの同国人が薄ぼんやりとした表情で見物している場面だった。この幻燈を見た魯迅はまもなく学校をやめた。一九二三年、「呐喊」自序で魯迅は書いている。

「この学年がおわらぬうちに私は東京へ出てしまった。あのことがあって以来、私は、医学など少しも大切なことではない、と考えるようになった。愚弱な国民は、たとい体格がどんなに健全で、どんなに長生きしようとも、せいぜい無意味な見せしめの材料と、その見物人になるだけではないか。病氣したり死んだりする人間がたとい多かるうと、そんなことは不幸とまではいえぬのだ。されば、われわれの最初になすべき任務は、彼らの精神を改造するにある。」(傍点引用者)

一国が他国を敵とするときに必要とされるただ一つの条件とは、国民が勇敢であることだと、一九二五年の「雑憶」

の中で魯迅は言っている。強者にむかって反抗せず、弱者にむかってはけぐちを求めるような国民では、強敵にたちむかう決意はもてないからだ。また「摩羅詩力説」では、ドイツの詩人ケルナーの例をあげ、国民がみな詩人であったからこそドイツは滅びなかったのだと述べている。バイロンたち悪魔派詩人の詩こそ、強者にたちむかう反抗の精神「生氣」と、詩人の魂とを国民に吹き込む「雄叫び」であると魯迅は考えたのだ。

日本留学以前すでに敵復の「天演論」に感銘をうけ、日本でもこの書を座右の書としていたという魯迅がバイロンの「強大な意志」に見出したものは「進化論」克服の一方論、すなわち宿命的に淘汰される弱者の側に属す人間の尊厳であったと思う。木村が「力の論理」の「雄叫び」をあげて、日本国民に「生氣」を吹き込もうとしたのは、今は弱者である日本が強者に這い上がるためであったが、それは必然的に次の弱者を前提とする。魯迅がのぞんだのは、この悪循環から抜け出すことであった。魯迅は雑誌『新生』の流産と、帰国後の革命の挫折から、しばらく「寂寞」の中で沈黙することになる。その沈黙のあと、一九一八年に書いた中国近代文学の嚆矢「狂人日記」の最後の一節、「人間を食ったことのない子供はまだいるかしらん。子供を救え……」は、自分の時代でこの悪循環をたとうとする、魯迅の「無償」の自己犠牲の叫びであった。

魯迅とは逆に、李光洙が進化論と本格的に出会ったのは、木村のバイロンを知ったあとである。亡国を契機に「力の論理」を痛感した李光洙は、五山学校時代に実感をもって進化論を真理として受け入れるようになった。そして木村の「強大な意志」、とりわけ先に引用した「欲望を以て強大たるなり」という木村の喝破は、李光洙が第二次留学時代に書く啓蒙論説文の「欲望の教育」に引き継がれることになる。

この第二次留学時代に書かれた長編「無情」(一九一七)の主人公が、自分と自分の世代を「幼い子供」としているのは、「狂人日記」の主人公と象徴的に対照的である。翌年発表された論説文「子女中心論」も、「我々は(中略)必要ならば祖先の墳墓もあばき、父母の血肉も我々の食糧とせねばならぬ」と、やはり子供の視点から書かれている。

だが「子女中心論」とよく似た内容をもつ魯迅の論説文「われわれは今日どのように父親となるか」(一九一九)は、その題名の示すごとく父親の視点、それも無償で犠牲にならうとする父親の決意をもって書かれている。

二人の作家のあいだのこの違いを、「子供意識」と「父親意識」と仮に名づけるなら、それを生み出したものももちろん李光洙と魯迅の個人的社会的な環境の差異、とりわけ資質の差異であろう。だが、魯迅が木村のバイロンと出会った以前すでに進化論に対する問題意識をもっていたことも、この相違をうみだす大きな要因となっていたと思われる。「強大な意志」によって日本を強者にしようという木村のバイロン解釈によるバイロンに心酔したことは、李光洙のなかに「力の論理」をうけいれる下地を形成し、李光洙はその後「人為進化」による「民族改造」をおこなうことで生存競争に生きのこる力を蓄えようという実力養成論、準備論へと進んでいった。「力の論理」をうけいれたとき、今は力をもっていない祖国と自分たちが、これから力をつけてゆく「幼い子供」であるという意識がうまれる。現在弱者の立場にあるものが「力の論理」に参加することは、自分たちの無力を徹底的に認めることからしか始まらないからである。

だがすでに進化論克服という課題をもっていた魯迅にとって、「強大な意志」とは淘汰の宿命を拒否する人間の尊厳の象徴であった。次の弱者を想定する「力の論理」を拒否するときにあられる弱者へのおもいやりが「父親意識」である。魯迅が自民族にのぞんだ「精神改造」は、その意味で李光洙の「民族改造」とは異なるものであった。

一九二一年、三一運動後の臨時政府の行きづまりに失望して上海から帰国してきたときの李光洙は、祖国が滅びたときよりもさらに深いところで「力の論理」を受けとめていたはずである。帰国後の李光洙は、一転して生存競争を「悪魔の思想」と呼び、人類を利己的な闘争本能の苦しみから救う道は「愛」しかないと訴えてトルストイに回帰している。だが彼が「力の論理」を棄てたわけではなかったことは、その後の多くの作品にあらわれている。そもそも

「嘉實」の主人公のように理想的な奴隷が、はたして奴隷根性をもった真の奴隷といえるだろうか。自分が奴隷であることを自覚しないのが真の奴隷である。嘉實は「力の論理」に反抗せず、「愛」によってそれを超克しようとする。しかし「力の論理」を受けいれて、かつ自ら奴隷の立場を受けいれるならば、それはルシファーの変形したものにすぎないように思われる。

八、ま と め

本稿では李光洙の明治学院中学時代の読書歴を調査し、まず中学時代前半に李光洙の心をとらえていた木下尚江とトルストイの思想を考察した。中学時代の終わりに五山学校時代の初めにかけて李光洙が心酔していたのはバイロンだった。中学時代の李光洙の読書の大半は洪命憲の影響下であり、バイロンも彼のすすめで読んだものだが、彼らの接したバイロンとは、日本主義者木村鷹太郎の翻訳と解釈をおしたバイロンであった、それは李光洙が五山学校で亡国をむかえて「力の論理」を痛感したとき、進化論を真理として受け入れる心理的な下地となった考えられる。李光洙が本格的に創作を始めたのは、バイロンに心酔していたこの時期であり、論説文「情育論」、散文詩「獄中豪傑」にその反映を見ることが出来る。筆者は、李光洙が「獄中豪傑」の想を、木村のバイロン評伝「バイロン文界之大魔王」に引用された「マンフレッド」の一節からとったものではないかと推定し、その仮定のもとでこの詩を読みなおしてみた。そうすることで初めてあらわれる、囚われの梟の「抵抗者」と「暴君」という二面性が、洪命憲の長編「林巨正」の主人公に見られることは、洪命憲が李光洙と東京で一時「獄中豪傑」の世界を共有していたことを改めて想起させた。

同じころ日本に留学していた魯迅は、「幻燈事件」を通じて民族の精神的改造の必要を痛感し、国民の精神に生氣をふきこむ力をもつ、バイロンを始祖とする悪魔派系譜の詩人たちを顕彰する評論「摩羅詩力説」を著した。だが来

日以前すでに進化論に出会っていた魯迅は、バイロンの強烈な自我賛美を、淘汰される側の人間の尊厳を意志の絶對的な力によって守るといふ、進化論克服の試みとして受け取った。

中国と朝鮮で、ともに近代文学の嚆矢といわれる作品を書いたこの二人の作家の顕著な違いを魯迅の「父親意識」、李光洙の「子供意識」と仮によぶならば、その違いを生み出した原因のひとつは、進化論に対する関わりかたの違いであったと思われるのである。

【付記】 本稿執筆にあたり、東京外国語大学の三枝壽勝先生からひとかたならぬ御助力をいただいた。心より感謝申し上げる。

註

本稿では三中堂発行「李光洙全集」(全十巻別巻 一九七二)を使用した。以下全集と略記する。

- (1) 一九一六年十一月『毎日申報』連載 全集1五四八頁
- (2) 一九一〇年八月『少年』全集1五七五〜五七七頁
- (3) 一九一五年三月『青春』第六号全集1五六八〜五七三頁
一九一三年末に五山学校を出て大陸を放浪した李光洙は、ロシアのチタで第一次大戦の勃発をむかえて一度五山に戻り、翌年日本に二度目の留学をした。「金鏡」が書かれたのは放浪と第二次留学のあいだの時期である。
- (4) 一九一七年一月から六月まで『毎日申報』連載 全集1一五〜二〇九頁。長編「無情」が自伝的要素を含んでいることを指摘した論文には、三枝壽勝『「無情」における類型的要素について』(『朝鮮学報』第一七輯昭和六十年十月)、小野尚美「李光洙『無情』の自伝的要素について」(同一二七

- 輯昭和六十三年四月)、金允植「李光洙斗 ユ斗 時代」7「無情」―その記念碑的性格 作家の自伝的要素と「無情」との関連性(『斗』一九八六 五五九〜五六三頁)などがある。
- (5) 一九三六年四月から六月まで『朝光』連載 全集8四四五〜四五七頁
- (6) 一九三六年十二月から翌年五月まで『朝鮮日報』連載 全集6二九九〜四三七頁
- (7) 一九四八年十二月春秋社刊 全集7二一九〜二八八頁
- (8) 「斗・少年篇」一九四七年十二月生活社刊、および「斗・早世 ユ斗」一九四八年十月博文書館刊。ともに全集6四三八〜五八六頁。「斗・少年篇」の序文「斗」을 쓰는데」に李光洙は、「ルソーは彼の懺悔録で、自分は後日審判の日

に神の御前にさしたる答弁としてこれを書くという意味のことを言ったが、私のものはそうしたものは違う」と書いている。(全集10五三六頁)

- (9) 「木下氏から得たキリスト教的理想により強い意義を見出だして」(『金鏡』全集1五七〇頁)
- (10) 「私はこの学校(M学校すなわち明治学院をさす)引用者)に入学してはじめてキリスト教の聖典というものを見た」(『ユ斗 自叙傳』全集6三二八頁)
- (11) 波田野節子「李光洙の自我」(『朝鮮学報』第一三九輯平成三年四月)
- (12) 「李光洙研究下」太学社一九八四所収
- (13) 同上所収
- (14) 韓承玉「李光洙研究」鮮一文化社一九八四
- (15) 「李光洙研究上」太学社一九八四所収
- (16) 「李光洙研究下」太学社一九八四所収
- (17) 金允植「李光洙斗 ユ斗 時代」二二三頁
- (18) 一九二五年三月、四月『朝鮮文壇』掲載 全集9三二八〜三三四頁
- (19) 「この本に私は、幼くして私の民族意識が芽生えてからの小経歴を書いた。合併前後、放浪生活、三一運動、その後第二次大戦中と解放直前の民族的動きのなかで、私がみずから関連したこと、見聞きしたこと、接触した人々のことを書いた。」(『斗』告白「序文」全集10五三九頁)
- (20) 以上全集1五六九、五七〇頁
- (21) 以上全集9三二八頁
- (22) 同上三二九頁
- (23) 同上三三〇頁

- (24) 同上三三一頁
- (25) 同上三三三二頁
- (26) 同上三三三三頁
- (27) 同上三三三四頁
- (28) 同上三三三三頁 明治四三年一月三日の日記に李光洙は、独歩の文章の一節をそのまま朝鮮語に翻訳しているが、出典は不明。
- (29) 以上全集8四四七頁
- (30) 同上四四八頁
- (31) 同上四四二頁
- (32) 同上四四六頁
- (33) 以上同上四四七頁 알제이, 파셀はアルツイパーシエフであろう。
- (34) 同上四四八頁
- (35) 全集6三四〇頁
- (36) 全集6五四四頁
- (37) 全集7二二八頁
- (38) 一九三五年『朝光』創刊号 全集10四八七〜九頁
- (39) 一九三五年十一月『朝鮮日報』全集10五九四〜六頁
- (40) 前掲波田野論文「李光洙の自我」(『朝鮮学報』第一三九号)の註8で、筆者はその可能性を指摘した。
- (41) 蔵書を紹介しながら李光洙は、「こうした本は当時の私の英語の知識ではよく読めもしないものだったが、それでも見栄と知識欲から持ち歩くものであり(後略)」と書いている。

(全集6五四四頁)

(42) 「洪君は黙って本を貸してくれることで、私の指導者となったと思います。(中略) 洪君は当時盛んに発売禁止処分をうけていた自然主義作品を、あちこちの本屋をさがしあるいは高い金で買い込んで来ては、私に自慢しました。(多難半生斗 途程) 全集8四四七頁)

「彼は(洪命憲:引用者)私にバイロンの詩と夏目漱石の小説を勧め、自分の本を貸してくれました。また彼はそのころ日本で紹介され始めて発売禁止になっていた文学雑誌を大急ぎで買いまわり、ついにそれを入手しては私に貸してくれました。この点で洪君は私には文学の先輩です」(斗斗告白) 全集7二二八頁

(43) 兪鎮午:泰西のものは?

洪命憲:ロシア作品を一番多く読みました。あのころは長谷川二葉氏の翻訳を読んだのですが、私のいるときに翻訳された作品は、一つ残らず読みました。とにかく古本であろうが新本であろうが全部集めて、借りてあるいて。(一九三七年七月十六・七・八日「朝鮮日報」〈文學對話篇〉 洪命憲・兪鎮午「碧初洪命憲」林巨正)의 재조명) 사계社社 一九八八 二五九頁)

洪命憲:外国のものはもちろん翻訳を通して読んだし、日本のものは小説が一番見やすいから、よく読んだよ。(一九四八年五月「新世代」洪命憲・薛貞植談話記 前掲書二九三頁) 薛貞植:ところでロシア小説は原文でお読みになったんで

トルストイ、後半五年生から五山学校赴任直後はバイロンに傾倒していたと考えられる。

(45) bとcはかなり難解な対訳書であるから、李光洙が読んだのはaであろう。

(46) 「復活」は明治四二年の読書目録に入っているが、後編が出たのは明治四三年一月である。李光洙が明治三六年から断続的に新聞連載されたものを読んだとは考えにくい。「斗」に出ている英訳全集で読んだ可能性はある。だが李光洙が「復活」に対していただいている雪のイメージから推して、彼がこのころ見たのは本ではなく「シベリアの雪」という「復活」を原作としてフランスで製作された活動写真ではないかとも思われる。(波田野節子「李光洙の自我」註29参照)

(47) 「イカモン」には有名なモーパッサンの「首飾り」の翻案をふくむ中短編四編が収録されている。人物や場所の設定は完全に日本になっており、著者内田實となっていて、所載のものはマウバスマン其他の焼直しにて翻訳とも翻案ともつかぬもの。勿論創作とは云へそうもなし。(凡例)とあるので、外国文学に分類する。

(48) 「野の花」はロマンティックな色彩が濃い田山の前期作品である。明治四三年一月十四日の「日記」にある「花袋集」は、あるいは明治四二年二月三月に佐久良書房から出た「花袋集第二」である可能性もあるが、そのどちらにも「野の花」は収録されていない。なお金允植氏の「李光洙斗 ユ斗 時代」は「野の花」の作者を前田林外にしている。林外は明治期に

獄中豪傑の世界(波田野)

すか。

洪命憲:翻訳で読んだにきまつてるじゃないか。ロシア語はやりかけで止めてしまった。私の外国語なんてどうしようもないよ。日本語がそれでも一番でした。あれは忘れようだったって、忘れない。(笑)(同上三〇二頁)

(44) 李光洙は中学三年の二学期(明治四〇年九月)に明治学院中学に編入した。「杜翁斗斗」によれば「我宗教」は中学四年生の同級生山崎俊夫が兄の書架から持ち出してきて李光洙に見せたという。李光洙が中学四年生だったのは明治四一年四月から四二年三月までである。明治四二年十一月の「日記」の読書傾向にはすでにバイロンへの傾倒が明白である。また「金鏡君がここ(五山学校:引用者)に来たのはちょうどこのときであった。そこで教師として赴任するやいなや、学課を済ましては連日長醉し、やはりバイロンをもって任じたのであった。」(「金鏡」全集一五七〇頁)という記述から、中学卒業前後に李光洙がバイロンに心酔していたことがわかる。そこで李光洙の読書の時期について、以下のような推定が成り立つ。

- 1 木下尚江 明治四〇年九月以降(中学三年)
- 2 トルストイ 明治四一年四月以降(中学四年)
- 3 バイロン 明治四二年ころから四三年夏(中学五年)五山学校に赴任したころまで)

これだけではあまりはっきりしないが、要するに李光洙は明治学院中学時代の前半、三年生から四年生にかけて木下と

活躍した詩人だが、「野の花」を出したのは昭和三年である。(明治文学全集60前田林外年譜参照)

(49) 明治四〇年発行の「天魔の怨」を見ると、本の外側の題名は「天魔の怨」であるが、中の作品名は「カイン」になっている。それで時間をへた李光洙の記憶の中では、「天魔の怨」が「カイン」に変わったのだろう。あるいは木村がその後出したバイロンの作品集では最初から「カイン」になっているので、李光洙も後にそれを読んだのかもしれない。

(50) 「ドンファン」が明治時代に訳されたという資料は発見できなかった。大正二年発行の「バイロン 評伝及詩集」の序で木村は「ドンファン」を「不幸にして未だ訳し得なかつた」と述べている。「バイロン文界之大魔王」には「ドンファン」の内容をかなり詳しく紹介した「女性および戀愛観」の章があるので、その記憶違いではなからうか。

(51) 註43参照

(52) 「日記」隆熙三年十一月十九日「島崎藤村の『破戒』を読む。平凡な気がする。」(全集9三三〇頁)「日記」隆熙四年一月十四日「花袋集」を読んでその勇氣に感服した。でも僕には批評の才能がないらしく、花袋のものはそれほどいいとは思わない。」(全集9三三八頁)

(53) 「多難半生斗 途程」全集8四五二頁

(54) 「これが(中学入学試験がおわり暇だったので本屋に行つて、真山、徳富、正宗の本を買ったこと:引用者) 文学書を読んだ出発だったが、そのあとはその本にある広告を見て、

- 手探りで(『속기처서 소경 파맛 배기름』読んでいった。)(一) 九四年八月『朝光』洪碧初・玄幾堂對談 註43書二六二頁)
- (55) 「私は小説を多く読む人間ではない。小説を書く私が小説を読むことを喜ばないといえは意外の感があるかもしれないが、事実だから仕方がない。」(『내가』小説을 推薦せ叶면) 一九三一『東亜日報』全集10五八六頁) 余의 作家的態度」にも同様の記述がある。(全集10四六〇頁)
- (56) 「金鏡」全集一五七〇頁
- (57) 同上 全集一五六九〜七〇頁
- (58) 全集八四四八頁
- (59) 木下尚江の作品と年譜については次の二冊を参考にした。
a 明治文学全集45「木下尚江」筑摩書房
b 現代日本文学体系9「徳富蘆花・木下尚江集」筑摩書房
- (60) 以上は李光洙が木下の「火の柱」を評して「金鏡」で使用している言葉である。(全集一五六九頁)
- (61) 同上
- (62) 註59 a b 書年譜の明治二五年参照。「厭世詩家と詩人」は明治二五年二月『女學雜誌』に掲載された。
- (63) 前掲三枝壽勝論文『無情』における類型的要素について(註4書二九頁)、白川豊『韓國近代文學草創期』日本の影響(『東國大學一九八一年度碩士學位論文六八頁])でもその指摘がなされている。
- (64) 註59 a 三八六頁「良人の自白」解題参照
- (65) 同上三二五〜六頁
- (66) この書は註59のa書に収録されている。李光洙の讀書歴にこの作品は見当たらないようである。木下が監獄での経験を語った第二十章「活説教」には、李光洙が一九三八年に書いた短編「無明」とよく似た、宗教に目覚める同業者のエピソードがある。(三〇一〜三〇四頁)
- (67) 同上二九〇〜二九三頁
- (68) 一九三五年十一月二〇日『朝鮮日報』全集10五九四〜五九六頁
- (69) 註44参照
- (70) 荒畑寒村の「寒村自伝」によれば、『平民新聞』創刊当時(明治三六年)平民社の事務所にはマルクスといっしょにトルストイやゾラの肖像が飾られていたという。(岩波文庫「寒村自伝」上八三頁)寒村はまたこう語っている。『平民新聞』の創刊一周年記念として平民社が発行した六枚一組の絵はがきには、マルクス、エンゲルス、ラサール、ペーベルに加えて、トルストイとクロボトキンが入っていた。(中略)要するに、当時はまだ純一な社会主義の思想体系が確立されていなかったと言っても、過りではないであろう。「長老格の社会主義者阿部磯雄は無抵抗主義者で、その非戦論の根本思想は「悪に抗するなかれ」であったという。(同上九九〜一〇〇頁)
- (71) 加藤直士訳は見る事ができなかったもので、河出書房新社一九七四トルストイ全集15宗教論(下)所収の中村融訳「わが信仰はいずれにありや」を用いた。トルストイの日本語翻訳状況については同全集別巻のトルストイ文獻を参考にした。

- (72) 同全集15解説 四五六頁
- (73) 同全集15六六頁
- (74) 同上六二頁
- (75) 同上六四頁
- (76) 同上六五頁
- (77) 波田野節子「李光洙の民族主義思想と進化論」で筆者は上海から帰国したあとの李光洙は、力によっての上昇が不可能なことを思い知り、「愛」による支配を望んだと述べた。
- (78) 『朝鮮学報』第一三六輯一八頁)
- (78) 隆熙三年十二月三十一日「今年読んだ本でも書いてみるか(文芸のみ)」とあり、二十四冊の書名があげられている。(全集9三三三頁)
- (79) 全集9三二八頁
- (80) 全集一五七〇頁、洪命憲の自分に対する影響力についての、この多分に誇張された表現には、オスカーワイルドの「ドリァングレイの肖像」における、主人公と年上の友人との関係を想起させるものがある。李光洙は「ドリァングレイの肖像」を上海で洪命憲に読まされたと言っており(註94参照)、「金鏡」が書かれたのは、それから約一年後である。李光洙は自分と洪命憲との関係を、ドリァングレイと、彼を「一冊の本ですっかり毒してしまった」(福田恒存訳新潮文庫)ヘンリー卿に比していると思われる。
- (81) 全集八四四七頁
- (82) 全集六三四〇頁:洪命憲は最初假人次に可人と号した。

獄中豪傑の世界(波田野)

- その由来を玄幾堂との対談で次のように語っている。「そのころバイロンの詩集を読んでカイン篇がひどく気に入って假人とした。その後中国に行ってみると假人が中国音ではチャレンになってしまふ。チャレンでは本意と違うから可人となおした。可人はコレンだからカインと音が似ているしね。」(註43書二六〇頁)
- (83) 日本におけるバイロン受容にかんしては、講談社発行日本近代文学館編『日本近代文学大事典(昭和53年)』の「日本近代文学とバイロン」の項および、日夏耿之介「本邦に於けるバイロン熱」(日夏耿之介全集第七卷一九七四河出書房新社)を参考にした。前者によれば、明治一九年七月刊「書生唱歌」には、大和田建樹訳「バイロンの青海原」が入っている。
- (84) 「チャイルド・ハロルド」の一節と「マンフレッド」の二節が訳されている。(明治文学全集60所収)
- (85) 透谷の作品は、筑摩書房現代日本文学体系6「北村透谷・山路愛山集」を参考にした。
- (86) 色川大吉「明治精神史」(上)第一部6「戦士・詩人・思想家」の生誕―透谷における現体験の意味―参照
- (87) ※北川透「幻境」への旅 北村透谷試論」冬樹社一九七四「不安な越境へ―楚囚之詩」と「蓬萊曲」について」
- ※前田愛「都市空間のなかの文学」筑摩書房一九八二「獄舎のニートピア」参照
- (88) 藤村の「春」は明治四一年四月から『東京朝日新聞』に連載され、その年の末に自費出版された。第二十八節には、

Roll on, thou deep and blue Ocean.”で始まるバイロンの「チャイルド・ホルド」終章の一節が、原文と浦原有明の訳で載っている。(浦原の訳はこの小説のための書き下ろしである。)この詩は一九一〇年六月「少年」第三年第六巻に、「大洋」という題で、繁浪という人物によって、原文付きで訳されており、金允植氏は繁浪を洪命憲の雅名ではないかと推測している。(『志社一九七三』「近代韓国文学研究」2、『少年』誌の虚構性 五一頁)金秉喆氏は繁浪のこの訳が原文から直接の訳ではなく、日本語からの重訳であることを明らかにした。(『西文化社一九七五』「韓国近代翻訳文学史研究」二九七頁)筆者としては、『少年』に掲載したほかの翻訳ではつねに重訳であることを明記している洪命憲の態度からして、繁浪は洪命憲ではないと考えている。『少年』第三年第三巻、假人の「書籍対社古人の讚美」あとがき参照)金允植氏は前掲書で、バイロンのこの詩と、崔南善の詩「海에 세사 少年에 세」の類似についても述べている。(同頁)

- (89) 妻をめぐらば才たけて
顔うるわしく情けある
友をえらばば書を讀んで
六分の俠氣四分の熱

あゝわれコレッチの奇才なく
バイロン、ハイネの熱なきも
石をいだきて野にうたふ

芭蕉のさびをよるこぼす

鉄幹の第三詩集「鐵幹子」(明治三四年三月大阪矢島誠信堂)に収められたこの詩には、「明治三十年八月京城に於て作る」という前書が添えられている。鉄幹は若いころ何度も訪韓し、閔妃事件にも関与したと思われる人物である。(明治文学全集51與謝野鐵幹・與謝野晶子の解題および年譜参照)

(90) 註83日夏耿之介「本邦に於けるバイロン熱」三五六頁

(91) 「……中学校の入学試験もおわって、ちょうど年始めでぶらぶらしているとき、本屋に買って買ったのが真山青果集と徳富蘆花集、正宗白鳥の『何處へ』だった。刊行されたばかりだったな。」一九四一年八月、玄幾堂との対談で洪命憲は、日本文学との出会いをこのように語っている。(註43書二六二頁)「青果集」は明治四〇年十二月に刊行されており、「何處へ」は翌明治四一年の一月から四月まで『早稲田文学』に連載されている。これらから、洪命憲が日本文学と出会ったのは、自然主義が全盛であった明治四一年初めであることがわかる。なお「徳富蘆花集」は該当するものがない。一九三七年七月の俞鎮午との対話では徳富蘆花の「巡礼紀行」(明治三九年刊行)と語っているので、その思い違いであろう。(註43書二五八頁)

- (92) 洪命憲・玄幾堂對談(註43書二六二頁)
- (93) 筑摩叢書9「明治文学史」二二三頁
- (94) 上海で洪命憲と再会したときのことを李光洙は次のよう

に語っている。「K(洪命憲の号假人…引用者)はオスカーワイルドの『ドリファングレイの肖像』を耽読していた。私はKからバイロンを紹介されてひどい目にあつたことがあるので、『ドリファングレイ』は読むまいとしたが、Kはどうしても読めといった。」(ユウ 自叙傳「全集6三五三頁註80参照)

- (95) 全集8四四七頁
- (96) 全集6三四〇頁
- (97) イギリスの詩人・批評家ロバート・サウジ(R. Southey 一七七四—一八四三)が、バイロンと論争のさいにこのように呼んだことから始まる。
- (98) 「刺青」は李光洙が帰国した明治四三年十一月、「少年」は翌年四月に発表された。

(99) 自然主義と浪漫主義にかんしては前掲中村光夫「明治文学史」のほかに、吉田精一「自然主義研究」―自然主義文学運動の概観(吉田精一著作集第七巻)桜楓社一九八一)を参考にした。

- (100) 正宗白鳥「自然主義盛衰史」六興出版部一九四八 三〇—三二頁
- (101) 明治四三年八月二二・二三日「東京朝日新聞」近代日本思想体系32「明治思想集Ⅲ」筑摩書房一九九〇所収
- (102) 「明治思想集Ⅲ」三〇八頁
- (103) 同上三〇七頁
- (104) 明治四三年八月稿 註101「明治思想集Ⅲ」所収
- (105) 同上三三六頁

獄中豪傑の世界(波田野)

- (106) 同上三七二—三三頁
- (107) 波田野「李光洙の自我」註39参照
- (108) 全集一五七七頁
- (109) 近代日本思想体系31「明治思想集Ⅱ」筑摩書房一九七七 四〇〇頁
- (110) 李光洙の讀書歴にある、長谷川天溪の著書「自然主義」所収
- (111) 吉田精一編「現代日本文学年表」筑摩書房昭和四十年
- (112) バイロンにかんしては、李光洙の讀書歴にある木村鷹太郎、米田實、關露香のバイロン伝記のほか、阿部知二の「バイロン」(阿部知二全集第13巻 河出書房新社一九七五)を参考にした。

(113) 註109「明治思想集Ⅱ」所収

(114) 「要は民衆最大の幸福を企図するにあり、是に於ては國家は自己の機能によりて外に對しては一國の獨立を全ふして其勢威を皇張し、内に対しては國民の秩序を維持して其利益を増進せむことを務む。」(『日本主義を贊す』註109書三九五頁)「生れたる後の吾人の目的は言ふまでもなく幸福なるにあり」(『美的生活を論ず』註109書四〇〇頁)橋川文三は次のように書いています。「樗牛の國家論は、むしろその当初から、かなり楽天的な、國家に方便の思想に基づけられたものであった。(中略)樗牛において、國家価値の絶対化(自己目的化)はむしろ主張されていない。価値的に絶対的なるものはいかにも上昇期の産業資本主義社会にふさわしい個人的功利

と幸福の理念であり、国家価値はその目的合理的の見地から形式的に主張されているにすぎない。」(高山樗牛)筑摩書房明治文学全集40三八七頁)李光洙の民族主義にも参考になる見解である。

- (115) 註83書三六〇頁
 (116) Thomas Moore(一七七九〜一八五二)アイルランド出身の詩人。バイロン終生の及人であり、その死後はバイロンの伝記を著した。凡例で木村は、「本書傳記に關する部分は、専らムーア卿の『バイロン卿の傳及び書翰』なる書物」によつたと断っている。

- (117) 「バイロン文界之大魔王」一四〇頁
 (118) 同上二六四頁
 (119) 同上二〇二頁
 (120) 同上二六七頁
 (121) 同上二七八頁
 (122) 同上二八三〜四頁
 (123) 全集一五二六頁
 (124) 全集九三三二頁「今日は風邪でひどく不快だ。どこにも行かず『情育論』を書いた。」
 (125) 同上三三二頁
 (126) 波田野「李光洙と自我」『朝鮮學報』第一三九輯八六頁
 (127) 「金鏡」全集一五七〇頁
 (128) 「バイロン文界之大魔王」二九二頁
 (129) 全集九三三二九頁

(130) 「バイロン文界之大魔王」二九三頁。これは「バイロン文界之大魔王」に引用されている文章で、「天魔の怨」(一三一頁)のものとは少し違っている。全体的に「バイロン文界之大魔王」に引用された文章の訳は意訳だが、ひきしまった感じがする。註附の暴君に關する「マンフレッド」からの引用文もそうである。(註147参照)

- (131) 「バイロン文界之大魔王」二九三〜四頁
 (132) 朝日選書三三五 ビーター・J・ボウラー著鈴木善次ほか訳「進化思想の歴史上」5地質学と自然誌 ジョルジュ・キュビエ 化石と生命の歴史 一八三〜一九四頁参照
 (133) 同上書 4人間觀と自然觀の变化 イギリス功利主義と自由放任主義經濟 一六四〜一七二頁参照
 (134) 「バイロン文界之大魔王」二九四頁
 (135) 同上
 (136) 同上二七六頁
 (137) 同上二七〇頁
 (138) 同上二七一頁
 (139) 同上二七二頁
 (140) 同上
 (141) 同上二七一頁
 (142) 全集九三三一頁
 (143) 波田野「李光洙の自我」八五頁
 (144) 金允植「李光洙斗ユリ時代」二六八頁
 (145) 角川漢和辞典

- (146) 「バイロン 評伝及詩集」(東盛堂大正十二年三月)序参照
 (147) バイロンの原文は以下の通り。

The Captive Usurper,
 Hur!d down form the throne,
 Lay buried in torpor,
 Forgotten and lone;
 I broke through his slumbers,
 I shiver'd his chain,
 I leagued him with numbers—
 He's Tyrant again!

(EVERYMAN'S LIBRARY No. 487
 "POEMS OF LORO BYRON" P 326/7

「バイロン文界之大魔王」に引用された木村の訳以外では獄中豪傑のイメージがつかみにくいことを示すために、他の訳を載せておく。

虜へられたる篡奪者は
 玉坐の上より引き墮され
 見かへる者なく只一人
 心喪ひ葬られぬ。
 我れ其睡りを目さまして、
 彼れの鐵鎖を破り棄て、
 彼れに味方を與へしかば、

獄中豪傑の世界(波田野)

彼れ暴君と復たなれり。

(大正十二年木村訳 註146書)

捕はれの身の篡奪者、
 王位より追ひ落され、
 忘れられてひとり寂しく、
 氣を失ひて横たはる。
 われはその者の眠りを覚まし、
 その鎖を断ち壊てり。
 (岡本成隆訳「バイロン全集」那須書房昭和四一年)

虜になつた偽王は、

その王座から蹴落とされ、
 世に忘れられてただひとり、
 氣を失つて身を臥した。
 そのまどろみに押し入つて
 おいらは鎖を打ち砕く、
 (小川和夫訳「マンフレッド」岩波文庫一九六〇)

- (148) 「バイロン文界之大魔王」二七七頁
 (149) 同上二八六頁
 (150) 註83日夏耿之介「本邦に於けるバイロン熱」三六〇頁
 (151) 連載当初は「林巨正伝」であったが、二度の中断のあと一九三七年連載再開時に「林巨正」と改題された。『朝鮮日報』

連載は一九三九年三月一日で完全に中断し、その翌年十月の「朝光」で連載を再開しようとしたが一回で終わった。(林榮澤・姜玲珠編「碧初洪命憲」林巨正」의 개조명」사계절社一九八八洪命憲年譜参照)

(152) 一九四六年一月雑誌『大潮』座談会で、李源朝の「林巨正」を読んでいると、三國志や水滸伝のような中国小説を読んでいるような気がします」という言葉に、洪命憲は「その点は作家としても同感です」と答えている。(註43「碧初洪命憲」林巨正」의 개조명」二七二頁) 文字を覚えるとすぐ西遊記や水滸伝にみふけたという(同上二五八頁) 洪命憲に中国小説の影響は明らかだが、バイロンの「海賊」の主人公コンラードの面影も否定できないと考える。

(153) 同上五八〜七〇頁「林巨正」連載六〇周年記念座談—韓国近代文学における「林巨正」の位置—廉武雄・林榮澤・パンソソワン・崔元植」参照

(154) 洪命憲「林巨正」1鳳丹編사계절社一九八五 二二二〜三頁

(155) 全集一五七四頁

(156) 洪命憲「林巨正」9火賊編三 二七〜三四頁

最後の一人はシン進士に感服した徐林のお情けで助かり、三人が生き残った。

(157) この年「スバルタの魂」「ラジウム論」を書いている。魯迅の作品および年譜は、主として松枝茂夫・竹内好編「魯迅選集」(全十三巻岩波書店一九八六)を用いたが、選集に収

る。

(162) 「雑憶」(一九二五)「魯迅選集」第一巻一九八頁

(163) 「魯迅選集」第一巻四四頁。伊藤虎丸氏はケルナーに対する魯迅のこうした関心のもちかたが啄木のそれと類似することから、魯迅と明治三〇年代日本文学とのあいだに「同時代性」を見出している。その意味では、李光洙と明治三〇年代日本文学との間にも、木村や高山を媒介とした「同時代性」が成立することになる。以下参照。

「明治三〇年代と魯迅」『日本文学』一九八〇年六月号

「魯迅と日本人」朝日選書二二八 一九八三

「近代文学における中国と日本」序説に代えて」(「近代文学における中国と日本」汲古書院一九八六所収)

(164) 北岡正子「魯迅の『進化論』」(「近代中国の思想と文学」東京大学文学部中国文学研究室編一九六七 二八頁)

(165) 波田野節子「李光洙の民族主義思想と進化論」三、五山学校時代(三) 葛藤の段階 参照

(166) 「精神教育の根本教育はすなわち意思の教育であり、換言すれば欲望の教育である。」(一九一六「教育家諸氏에게」全集一〇五九頁)

録されていないものは、学習研究社「魯迅全集」(全二十巻昭和五九〜六一一年)を利用にした。

(158) 「魯迅選集」第五巻三五〜三六頁

(159) ※中島長文「監本『摩羅詩力説』第四・五章」(『颯風』第五号一九七三年六月颯風の会発行)

※北岡正子「摩羅詩力説」の構成」(「近代文学における中国と日本」汲古書院一九八六所収) 北岡氏はこの論文以前に、「摩羅詩力説」の材源にかんするきわめて詳細な研究「摩羅詩力説」材源考ノート」を一九七二年から中国文芸研究会誌「野草」に連載している。

※藤井省三「中国におけるバイロン受容」(『日本中国學會報』第三二号一九八〇) この論文は平凡選書一〇〇「魯迅」にも収録されている。

(160) 「魯迅全集」第五巻九一頁

(161) 「魯迅選集」第一巻九頁。竹内好は、「幻燈事件と文学志望とは直接の関係がないというのが私の判断である。(中略)私は、魯迅の文学を、本質的に功利主義と見ない。」と、この事件の「伝説化」に反対する立場をとっている。(「魯迅」未來社一九六一 七〇〜七一頁) この幻燈事件について魯迅は短編「藤野先生」(一九二六)の中でも触れている。事件の後、仙台を去ることを恩師の藤野先生に告げたとき、残念がる先生を慰めるために魯迅は、「生物学を習うつもりです。」と言ったという。李光洙の長編「無情」第一二五節のヒョンシクの宣言、「生物学を研究しようと思えます。」を想起させ

(167) 「無情」一一五節 全集一九二二〜三頁

(168) 全集一〇三七頁

(169) 「魯迅選集」第五巻一一〇〜一二七頁

(170) 金允植氏は「魯迅と韓國文學」でこの二人の作家の差異に注目して、その原因を「魯迅は彼の祖国が半植民地状態であり、李光洙はそれが完全な植民地状態であったという点」にもとめ、「精神的文脈からみると、こうした事態は父意識の喪失としてあらわれる。」と述べている。だが二人の差異の原因はこの説明だけで充分とは思われない。(キ) 韓國近代文學思想」瑞文堂一九七八 二五九頁 この論文は「金允植選集」(「조선과 이육사」)と改題されて収録されている。文学思想社一九九二)

(171) 「相争의 世界에서 相愛의 世界에」全集一〇一七五頁

(172) たとえば、李光洙の詩歌を「力の論理による自我の外面化と超越的理想による自我の内面化」という二つの機軸から解釈した、崔東鎭氏の「春園李光洙詩歌論」を参照(「李光洙研究下」五九九〜六二〇頁)

(173) 全集八 一〇八〜一三一頁

(新潟大学非常勤講師・新潟市関屋下川原町一―四八〇)